徳島県における動詞の語法概観

徳島県における動詞の語法概観

(1) 現在までの研究概観その他 …… 1
(II) 活用と表現の類型 …… 3
(III) 注意すべき動詞と表現 …… 16
(IV) 活用形と表現 …… 30
(V) 補助動詞と表現 …… 61
(VI) まとめ …… 76
(VII) 別図 …… 85

森　重　幸

3. 81
45
徳島
093854

国立国語研究所蔵書

ZZ093

国立国語研究所

はしがき

本稿は、県教育委員会の長期研究生（昭和36年度）として、徳島県の方言調査に従事したさいにまとめた中間報告である。

本県の方言研究については、金沢氏をはじめ先学諸氏の有益な成果があるが、この中間報告も、これらの成果に導かれ、その基礎にたつて概観したこころみである。

浅学未熟なため、独断的な面が多いと反省するが、今後各界の指導をうけて補正したい。

以下各品詞、表現論、語彙などに及ぶ予定である。

1964. 6. 30

徳島県立城東高等学校定時制

森　重　幸

〔I〕 現在までの研究概観・その他

1. 徳島県の動詞については、すでに、金沢、井上、森本、その他諸先学の貴重な調査報告と研究がある。

2. すなわち、金沢氏は、昭和初期以来本県の方言を研究され、「ナ変動詞」「コソーこ然形」の係り結び・「サ行五段イ音便」などを指摘された。

また、語構成からみた動詞分類、待遇による整理をはじめ「疑問語——仮定形」の呼応などを、くわしくまとめられている。

（注）1. 阿波方言の語法——方言二の一

2. 阿波美馬郡方言語彙——方言四の二

3. 阿波言葉の辞典——徳島市立図書館

4. 阿波言葉の語法——徳島市立図書館

3. つぎに井上氏は本県の中央山地南を調査し「バ行五段ウ音便」をはじめ、山間部における古語を集録された。

（注）1. 徳島県祖谷方言語彙——方言六の七

2. 木頭地方方言語彙　郷土阿波十四号

4. さらに、森本氏の品詞別分類による動詞の整理、奥里氏、宮城氏川島氏の体系的研究などがあり、その他郷土誌・機関誌などにも有益な成果がまとめられている。

（注）1. 阿波方言集——阿波民俗叢書　第三輯

2. 四国の方言——三省堂

3. 徳島方言概観——徳島大学学芸紀要第五巻

4. 方言学講座第三巻——東京堂

5. 出羽島の方言——海部教育研究所研究紀要第七輯

6. 郷土阿波——郷土教育研究会

7. 阿波方言——阿波方言学会

5. 先学諸賢の、このような努力により、本県の動詞は、その概要を

把握できるようになった。そこで、さらにすすめて「活用」・「活用形」などを整理し、これらの用法や分布状況をみていく段階にある。

6. 本稿は前記の成果をもとにし、徳島県の動詞の語法について概観したものである。

7. この調査は、1957年7月から1962年3月までの間に、臨地調査と通信調査を並用して逐次行った。

通信調査は、約160人の高校生に依頼して出身町村の状況を報告してもらい、同時に、市町村教育委員会その他の協力もいただいた。

これらは、いずれも後日現地で確認するようつとめた。

調査地点は、旧区画による県下全市町村130のほか、30地点を加えた160地点である。

8. 未調査、未整理の項目、疑問点などがあるので、本稿は、いわば中間報告程度のものであり、今後補正していく予定である。

(1) 五段活用

表 1.

	行	例語	未然		連用		
					命令法	たい・ます	ある・よる
1	カ	置く	オキャ(ー)	せん へん	オキ(ー)	オキ	オキ オキョ(ー)る オッキョる
			オカ(ー)	えん へん			
			オケ(ー)	へん えん			
			オカ	ず な(や) んす れる			

〔II〕 活用と表現の類型

1. 目下、本県の動詞の分類整理中であるが、その活用は、つぎのような類型になるものとおもわれる。

(注) 1. 表1～5参照

2. 別表～別図参照　　P78～P81. P85. 巻末

2. ハ行上一段は「干る」だけで、北方山分で用いるのみである。

3. ヲ変動詞は主として平地分で用いられ山分地方ではほとんど用いられない。

4. ナ変「死ぬる」・「往ぬる」は山分で多用されるが、平地分ではほとんど用いない。

5. 下一段「蹴る」は各地で比較的多用されており、とくに山分、里分、海分での使用度が高い。

6. その他は、全県的に用いられているが、活用のしかたや、活用形に多少の変化が見られる。

用	終止・連体	感嘆	仮定	已然	命令	志向	禁止
て.た.とる つろう.たろう とろう……	げな.ような だろう.ろう …….				よ.だ.ろ	うく(よう.ろう) いな(よいな)	な.まい
オイ	オク	オカイ オカー	オギャ(ー)		オケ(ー)	オコ	オク オキ

	行	例語	未然	連		
				命令法	たいます	あるよる
2	ガ	つなぐ	ツナギャ(ー) ツナガ(ー) ツナゲ(ー)	ツナギ(ー)	ツナギ	ツナギ ツナギョ(ー) ツナッギョ ツナンギョ
3	サ	さがす	サガシャ(ー) サガサ(ー) サガセ(ー)	サガシ(ー)	サガシ	サガシ サガショ(ー) サガッショ サガヒ
4	タ	持つ	モチャ(ー) モタ(ー) モテ(ー)	モチ(ー)	モチ	モチ モチョ モッチョ
5	ナ	死ぬ	シニャ(ー) シナ(ー) シネ(ー)	シニ(ー)	シニ	シニ シニョ(ー) シンニョ
6	バ	飛ぶ	トビャ(ー) トバ(ー) トベ(ー)	トビ	トビ	トビ トビョ(ー) トッビョ トンビョ
7	マ	飲む	ノミャ(ー) ノマ(ー) ノメ(ー)	ノミ	ノミ	ノミ ノミョ(ー) ノッミョ ノンミョ
(ア)		有る	アリャ(ー) アラ(ー) アレ(ー)	アリ	アリ	アリ アリョ(ー) アッリョ アッジョ アンリョ アンジョ アイ

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志向	禁止
て、た、とる、つろう、たろう、とろう……	げな、ような、だろう、ろう……				よ、だ、ろ	う（ようろう）いな（よいな）	な、まい
ツナイ	ツナグ	ツナガイ ツナガー	ツナギャ(ー)		ツナゲ(ー)	ツナゴ	ツナグ ツナギ
サガシ サガイ サゲヒ	サガス	サガサイ サガサー	サガシャ(ー)		サガセ(ー)	サガソ	サガス サガシ
(モ) モツ	モツ	モタイ モター	モチャ(ー)		モテ(ー)	モト	モツ モチ
シン	シヌ	シナイ シナー	シニャ(ー)		シネ(ー)	シノ	シニ シヌ
トン トー	トブ	トバイ トバー	トビャ(ー)		トベ(ー)	トボ	トビ トボ
ノン ノー	ノム	ノマイ ノマー	ノミャ(ー)		ノメ(ー)	ノモ	ノミ ノム
アッ	アル	アライ アラー	アリャ(ー)	アレ	〔アレ(ー)〕	アロ	アリ アル (アン)

	行	例語	未然	連		
				命令法	たい・ます	おる・よる
8	ラ	取る	トリャ(ー) トラ トレ(ー)	トリ	トリ	トリ トリョ(ー) トッリョ トッジョ トンリョ トンジョ トイ

(2) アワ行五段活用

表2

	行	例語	未然	連		
				命令法	たいます	おる・よる
1	アウ短	買う	カヤ(ー) カワ(ー) カエ(ー)	カイ(ー)	カイ	カイ カよ(ー)る
2	アウ長	洗う	アラヤ(ー) アラワ(ー) アラエ(ー)	アライ	アライ	アライ
3	ウウ短	食う	クヤ(ー) クワ(ー) クエ(ー)	クイ	クイ	クイ クよ(ー)る
4	ウウ長	掬う	スクヤ(ー) スクワ(ー) スクエ(ー)	スクイ	スクイ	スクイ
5	オウ短	酔う	ヨヤ(ー) ヨワ(ー) ヨエ(ー)	ヨイ	ヨイ	ヨイ ヨよ(ー)る

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志何	禁止
て、た、とる つろう たろう とろう……	げな、ような だろう、ろう ……				よ、だ、ろ	~~ろう~~、ようろう いな（よいな）	な、まい
ト ッ	ト ル	トライ トラー	トリャ(ー)		トレ(ー)	ト ロ	トリ トル トン

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志何	禁止
て、た、とる つろう たろう とろう……	げな、ような だろう、ろう ……				よ、だ、ろ	~~ろう~~、ようろう いな（よいな）	な、まい
カ ー コ ー	カ ウ	カワイ カワー	クヤ(ー)		カエ(ー)	カ オ	カ イ カ ウ
アラ(ー) アロ(ー)	アラウ	アラワイ アラワー	アラヤ(ー)		アラエ(ー)	アラオ	アライ アラウ
ク(ー)	ク ウ	クワイ クワー	クヤ(ー)		クエ(ー)	ク オ	ク イ クーワ
スク(ー)	スクウ	スクワイ スクワー	スクヤ(ー)		スクエ(ー)	スクオ	スクイ スクウ
ヨ (ー)	ヨ ウ	ヨワイ ヨワー	ヨヤ(ー)		ヨエ(ー)	ヨ オ	ヨ イ ヨ ウ

	行	例語	未然	連		
				命令法	ます.たい	おる.よる
6	オウ長	誘う	サソヤ(ー) サソワ(ー) サソエ(ー)	サソイ	サソイ	サソイ
7	ユウ	言う	イヤ(ー) イワ(ー) イエ(ー)	イー	イー	イ(ー)

(3) 上一段活用動詞

表3

	行	例語	未然	連		
				命令法	ます.たい	おる.よる
1	カ	起きる	オキヤ(ー) オキ(ー) オキラ セン ヘン エン イン ん	オキ(ー)	オキ	オキ オキよ(ー) オッキよ
2	ガ	過ぎる	スギヤ(ー) スギ(ー) スギラ	スギ(ー)	スギ	スギ スギよ(ー) スッギよ スンギよ
3	ザ	綴じる	トジヤ(ー) トジ(ー) トジラ	トジ(ー)	トジ	トジ トジよ(ー) トッジよ トンジよ
4	タ	落ちる	オチヤ(ー) オチ(ー) オチラ	オチ(ー)	オチ	オチ オチよ(ー) オッチよ

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志向	禁止
て、た、とる フロウ、たろう とろう----	げな、ような だろう、ろう ----				よ、だ、ろ	~~うよ~~、よう、ろう いな（よいな）	な、まい
サソ（ー）	サソウ	サソワイ サソワー	サソヤ（ー）		サソエ（ー）	サソオ	サソイ サソウ
エー	エウ	イワイ イワー	イヤ（ー）		イエ（ー）	イオ	イー ユー

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志向	禁止
て、た、とる フロウ、たろう とろう---	げな、ような だろう、ろう ----				よ、だ、ろ	~~うよ~~、よう、ろう いな（よいな）	な、まい
オキ	オキル	オキライ オララー	オキリャ（ー） オキャー		オキー	オキ オキュ オキョ オキロ	オキル オキン オキ
スギ	スギル	スギライ スギラー	スギリャ（ー） スギャー		スギー	スギ スギュ スギョ スギロ	スギル スギン スギ
トジ	トジル	トジライ トジラー	トジリャ（ー） トジャー		トジー	トジ トシュ トジョ トジロ	トジル トジン トジ
オチ オツ	オチル	オチライ オチラー	オチリャ（ー） オチャー		オチー	オチ オチュ オチョ オチロ	オチル オチン オチ

	行	例語	未然	連		
				命令法	ますたい	おるよる
5	ナ	似る	ニヤー ニー ニラ	ニ(ー)	ニ(ー)	ニ(ー) ニよ(ー)
6	ハ	干る	ヒヤー ヒー		ヒー	ヒ(ー) ヒよ(ー)
7	バ	のびる	ノビヤ(ー) ノビ(ー) ノビニ	ノビ(ー)	ノビ	ノビ ノビよ(ー)
8	マ	見る	ミヤー ミー ミラ	ミ(ー)	ミ	ミ(ー) ミよ(ー)
9	ラ	下りる	オリヤ(ー) オリ(ー) オリラ	オリ(ー)	オリ	オリ オリよ(ー)

(4) 下一段活用

表4

	行	例語	未然	連		
				命令法	ますたい	おるよる
	ア	植える	ウヤ(ー) ウエ(ー) ウエラ	ウエ(ー)	ウエ	ウエ ウよ(ー)る

用	終止連体	感嘆	仮定	て然	命令	志向	禁止
て、た、とる ろう、たろう とろう……	げな、ような だろう、ろう ……				よ、だ、ろ	~~う~~、ろう、よう いな（よいな）	な、まい
ニ（ー）	ニル	ニライ ニラー	ニリャ（ー） ニヤー		ニー	ニ ニュ ニョ ニロ	ニル ニン ニ（ー）
ヒ（ー）	ヒル	ヒライ ヒラー	ヒリャ（ー） ヒヤー		ヒュ ヒョ ヒロ	ヒル ヒン ヒ（ー）	
ノビ	ノビル	ノビライ ノビラー	ノビリャ（ー） ノビャー		ノビー	ノビ ノビュ ノビョ ノビロ	ノビル ノビン ノビ
ミ	ミル	ミライ ミラー	ミリャ（ー） ミャー		ミー	ミ ミュ ミョ ミロ	ミル ミン ミ
オリ	オリル	オリライ オリラー	オリリャ（ー） オリャー		オリー	オリ オリュ オリョ オリロ	オリル オリン オリ

用	終止連体	感嘆	仮定	て然	命令	志向	禁止
て、たる ろう、たろう とろう……	げな、ような だろう、ろう ……				よ、だ、ろ	~~う~~、よう、ろう いな（よいな）	な、まい
ウエ	ウエル	ウエライ ウエラー	ウエリャ（ー） ウャ（ー）		ウエー	ウエ ウヨ ウエロ	ウエル ウエン ウエ

	行	例語	未然	連用		
				命令法	たい、ます	おる、よる
2	カ	蹴る	ケヤー ケー ケラー	ケ(ー)	ケ	ケ ケよ(ー) ケィ ケー
3	ガ	逃げる	ニゲヤ(ー) ニゲ(ー) ニゲラ	ニゲ(ー)	ニゲ	ニゲ ニゲよ(ー)
4	サ	やせる	ヤセャ(ー) ヤセ(ー) ヤセラ	ヤセ(ー)	ヤセ	ヤセ ヤセよ(ー)
5	ザ	まぜる	マゼャ(ー) マゼ(ー) マゼラ	マゼ(ー)	マゼ	マゼ マゼよ(ー)
6	タ	あてる	アテャ(ー) アテ(ー) アテラ	アテ(ー)	アテ	アテ アテよ(ー)
7	ダ	なでる	ナデヤ(ー) ナデ(ー) ナデラ	ナデ(ー)	ナデ	ナデ ナデよ(ー)
8	ナ	はねる	ハネヤ(ー) ハネ(ー) ハネラ	ハネ(ー)	ハネ	ハネ ハネよ
9	バ	焼べる	クベヤ(ー) クベ(ー) クベラ	クベ(ー)	クベ	クベ クベよ(ー)
10	マ	きめる	キメヤ(ー) キメ(ー) キメラ	キメ(ー)	キメ	キメ キメよ(ー)

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志何	禁止
てた、とる つろう たろう とろう…	げな、ような だろう ろう ……				よ、だ、ろ	よう ろう いな(よいな)	な、まい
ケ(ー)	ケル	ケライ ケラー	ケリャ(ー) ケヤー		ケー	ケ ケヨ ケロ	ケル ケン ケ
ニゲ	ニゲル	ニゲライ ニゲラー	ニゲリャ(ー) ニゲヤー		ニゲー	ニゲ ニゲヨ ニゲロ	ニゲル ニゲン ニゲ
ヤセ	ヤセル	ヤセライ ヤセラー	ヤセリャ(ー) ヤセヤー		ヤセー	ヤセ ヤセヨ ヤセロ	ヤセル ヤセン ヤセ
マゼ	マゼル	マゼライ マゼラー	マゼリャ(ー) マゼヤー		マゼー	マゼ マゼヨ マゼロ	マゼル マゼン マゼ
アテ	アテル	アテライ アテラー	アテリャ(ー) アテヤー		アテー	アテ アテヨ アテロ	アテル アテン アテ
ナデ	ナデル	ナデライ ナデラー	ナデリャ(ー) ナデヤー		ナデー	ナデ ナデヨ ナデロ	ナデル ナデン ナデ
ハネ	ハネル	ハネライ ハネラー	ハネリャ(ー) ハネヤー		ハネー	ハネ ハネヨ ハネロ	ハネル ハネン ハネ
クベ	クベル	クベライ クベラー	クベリャ(ー) クベヤー		クベー	クベ クベヨ クベロ	クベル クベン クベ
キメ	キメル	キメライ キメラー	キメリャ(ー) キメヤー		キメー	キメ キメヨ	キメル キメン キメ

	行	例語	未然	連		
				命令法	たい、ます	おる、よる
11	ラ	入れる	イレャ(ー) イレ(ー)	イレ(ー)	イレ	イレ イレよ(ー)

(5) 変格活用

	行	例語	未然	連		
				命令法	たい、ます	おる、よる
1	カ	来る	キャー キー ケー キラ コラ > す キ コ > さす	キ(ー)	キ	キ キよ(ー)
2	サ	する	シャー シー セ(ー) セラ シラ > さす セ シ > さす	シ(ー)	シ	シ シよ(ー)
3	ナ	死ぬる	シネ(ー) シナ(ー) シニャ(ー) シネ(ー)	シニ(ー)	シニ	シニ シニよ シンニよ
4	ラ	なさる	ナサリャ(ー) ナサラ(ー) ナサレ	ナサリ	ナサリ ------ ナサリ ナサイ	ナサリ ナサイ ナサッリよ ナサンリよ

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志何	禁止
て、た、とる つろう、だろう とろう……	げな、ような だろう、ろう ……				よ、だ、ろ	~~ようろう~~、ようろう いな（よいな）	な、まい
イ レ	イ レ ル	イレライ イレラー	イレリャ(ー) イレャー		イレー	イ レ イ レ ヨ	イレル イレン イ レ

用	終止連体	感嘆	仮定	已然	命令	志何	禁止
て、た、とる つろう、だろう とろう……	げな、ような だろう、ろう ……				よ、だ、ろ	~~ようろう~~、ようろう いな（よいな）	な、まい
キ	ク ル	クライ クラー	クリャ(ー) キャー		コ イ	コ	クル クン ク キ
シ	ス ル	スライ スラー	スリャ(ー) シャー	スレー セ ー	セ ー	シ ショ （シロ）	スル スン ス シ
シン	シヌル	シヌライ シヌラー	シニャー		シネー	シノ	シヌル シヌン シ ヌ シ ニ
ナサッ	ナサル		ナサリャ(ー)		ナサレ （ナサイ）	ナサロ	ナサル ナサン ナサリ

〔Ⅲ〕注意すべき動詞と表現

活用の行別に、若干の動詞について注意すべき点をみていく。

(1) 「老いる」・「悔いる」・「報いる」

1. 本来ではア行上一段をほとんど用いない。

「老いる」は、五段「老いこむ」・下一段「老いぼれる」のように複合動詞として用いる程度である。

その他、五段「年とる」・「年(が)よる」、下一段「ふける」「年よせる」などを適宜用いている。

2. 「悔いる」の意味として、五段「くやむ」、「ほいながる」などが用いられる。また、都市部青年層がサ変「後悔する」を用いることもある。

3. 「報いる」も、「良い報い」のように名詞化して用いる程度である。「恩に報いる」の場合は、五段「恩(を)返す」、サ変「恩返しする」のように用いる。

(2) 「鋳る」・「率いる」・「用いる」・「居る」

1. 上一段「鋳る」は、日常生活に関係ないようすいが、五段「鋳こむ」とともに、まれに用いるようである。

ちなみに、下一段「鋳かける」は、鍋釜類をハンダ修理することに用いる。

2. 「率いる」は用いない。「連れていく」を用いる。そして「連れて」は「チェーテ」「テーテ」のようになる場合が多い。

ちなみに、「連れだって」は、「チェザッテ」、「チェダッテ」「テダッテ」、「ツレコッテ」・「ヒヒツーレコッテ」などを用いている。

また、サ変「引率する」は、共通語的な会話で用いることがある。

3. 「用いる」はなく、「使う」、「使うてみる」などが一般的で

ある

4 上一段「居る」は、ていねいな共通語的な会話の場合、「居ます」・「居ません」のように用いる程度である。五段「居る」は一般的である。

(3) 「得る」・「心得る」

1. 下一段「得る」は用いない。「手に入れる」その他を代用している。

2 下一段「心得る」は、成年層がときどき用いている。

(4) 「飽きる」・「飽く」

1. いずれも使用度が低く、連用形が慣用される程度である。

〈1〉アカズニ ヨースルガナ（飽きないで、よくやるものだね。勝）

〈2〉オマイノ ユーコトヤ アキアキシタゾ（お前の言うことなんか、聞き飽きたで！同）

〈3〉アキモセズニ ミ（ー）イツトルワ（飽きもしないで見つめているよ。同）

〈4〉オマイノ ユーコトヤ キキアキタワ（お前の言うことなんか、聞き飽きたぞ！同）

2. 五段活用未然形は、上郡平地分その他で年配層がまれに用いる。また、〈4〉の上一段活用連用形は、下郡平地分、南方平地分などで、都市部の青年層が用いることがある。

注 表6、7 別図No.2参照

3. 「飽きる」の意味として、本県では、五段「足る」を多用している。前記用例も〈2〉をのぞき、むしろ「足る」を多用している。

4 以上を考え合せると、五段「足る」の意味が拡大し使用せられそのために、五段「飽く」の使用度が低下した。一方共通語化の影響により、上一段「飽きる」が用いられはじめたとおもわれる。

(5) 「おどろく」

1. 五段「おどろく」は、「目をさます」の意味として年配層が用いている。ただし平地分都市部では、高年層が少用するにすぎない。

2 「驚く」の意味として、下一段「おぶける」サ変「びっくりする」が一般的である。

3. その他、下一段「おーける」が「佐馬地」、「碧蔵」、「昼間」などで用いられ、下一段「おくれる」が「三名」、「西俣谷」などで用いられる。

注、別図 NO.1参照 以下 NO.2表、6、7とともに適宜参照

また、下一段「おどける」は、「南方山分」、「南方海分B7(下滝)」で用いる。

(6) 「嗅ぐ」、「におう」

1. 五段「かぐ」のほかに、五段「かざむ」、「かざかむ」を多用する。

2 また、五段「におう」は、自動詞のほかに、「嗅ぐ」の意味として他動詞にも用いる。

〈5〉コノハナ チョット ニオーテミナイダ。エーカサガ スルンデヨ(この花、ちょっと匂いをかいでごらんよ。よい香りがするんですよ平地分)

(7) 「分く」、「分ける」

五段「分く」は、野菜類の密植状態を適宜に除去し、ととのえることに用いる。農業に関する用語であるため、山分、海分、都市部では用いない。

その他の場合は、下一段「分ける」が一般的である。

(8) 「蹴る」

1. 平地分では、複合動詞の場合、「蹴りとばす」ではなく「蹴とばす」のようになって下一段的であるが、その他の場合は五段活用が多用されている。

注　別図 NO. 3 参照

2. しかし、山分、里分、海分では年配層が下一段を多用しており若年層も五段、下一段を両用している。そして山分ほど下一段の傾向が強い。

〈6〉ホンナ　ボール　エ(ー)　ケンジャ（そんな要求蹴られないよ。西祖谷）

〈7〉ボール　ハヨ(ー)　ケテミー（ボールをはやく蹴ってみろ！一宇）

〈8〉ボール　コッチー　ケテンダ（ボールをこちらへ蹴ってよ！伊岐）

〈9〉ハヨー　コッチー　ケーダ（はやくこちらへ蹴ろよ！一宇）

3. どの活用形から、また、どの地方からはやく五段化するかについても調査してみたが別の機会にのべたい

(9)「できる」、「でける」

ともに用いるが、下一段「でける」の使用度が高い。上一段「できる」は、ていねいな感じがある、とする者が、比較的多いようである。

(10)「合わせる」、「合わす」その他

1. 他動詞としては五段「合わす」を多用し、下一段はほとんど用いない。「会わせる」、「会わす」の場合も同様である。

2. その他、「任せる」の場合も、本来では五段「任す」となる。また「のぼせる」は、五段、下一段に両用する。

〈10〉アレニワ　モー　ミゴト　マカセルワ（彼にはもう仕事を任せることができるよ。全）

〈11〉アレニワ　モー　ミゴト　マカスワ（彼にはもう仕事任せるよ。同）

3. これらについては、すでに金沢氏が指摘されているが、満足するならば、「合わせる」、「会わせる」、「任せる」など下一段

活用は可能動詞に用いるだけである。

なお、五段自動詞、「合う」とともに「合わさる」が平地分その他で用いられることがある。前記「合わす」、「合わせる」などに類推してできたものであろうか。命令形を欠いている。

〈12〉ヨーヤノカイデ　コノ　フタガ　アワサッタワ（① このふたが　ようやく　うまく合ったよ。② ようやく　このふたを合せることができたよ　同）

(11)「乗せる」、「乗す」

1. 下一段「乗せる」は全県的であるが、下都平地分、南方平地分の都市部地方で、五段「乗す」が多用されている。若い世代にいちぢるしく、今後使用範囲が増大するものとおもわれる。

〈13〉アンナコ　スカン　ノサタレハンワ（あんな子はきらいだよ、乗せてやらないよ！　小松島）

〈14〉ホノコ　ノストキ　ヨーキ　ツケ（ー）ヨ（その子を乗せる時、よく気をつけなさいよ。　同）

2. 未然形「乗サん」の使用度はやや低い。

3. 同様な変化が　下一段「着せる」、「見せる」などの連用形にもみられる。

「キミタレハン」――着せてやらない。「ミミタレハン」―見せてやらない。などを、若い世代が用いはじめたようである。

(12)「煮じる」、「感じる」その他

1. 上一段に活用する。サ変には用いないようである。

その他、「案じる」、「信じる」、「通じる」なども同様である。

2. これらについても、すでに、金沢氏が指摘されている。

注　阿波言葉の語法

(13)「する」、「しろぐ」、「さっしゃる」その他

1. 「する」の尊語として、五段「しろぐ」、「ひろぐ」、「しゃ

がる」、「さらす」などがあり、男子青年層に用いられることがある。

2. 「しろぐ」、「かろぐ」は南方地方では、ほとんど用いない。これに対し、「さらす」は、上郡(カミゴオリ)地方ではほとんど用いないようである。

3. 「する」の尊敬語として、五段「なさる」、「せさっしゃる」「さっしゃる」などがある。

4. 「なさる」は平地分で多用されるが、里分での使用度は低く、山分、海分ではほとんど用いない。「なはる」となると親愛感をも表わす。補助動詞にも用いられることはいうまでもない。

5. 「さっしゃる」型は、山分および上郡その他で年配層が用いる。美馬郡山地以外では、使用度が低下している。

6. なお、「っしゃる」、「さっしゃる」は本来助動詞で、五段動詞には「行カっしゃる」、一段系動詞には「起キさっしゃる」のように未然形に接続し、変格系動詞には「来(コ)さっしゃる」、「来(キ)さっしゃる」のようになる。

注 別図 NO.5 参照

(14) 「立つ」、「立ちる」、「立てる」

1. 五段「立つ」は、生物が主語の場合は使用度が低く、「立てる」、「立ちる」が多用されている。

注 別図 NO.9 参照

2. 「立ちる」はラ行五段自動詞で、「立てる」は徳島近県と同様にラ行五段自動詞とタ行下一段他動詞に両用する。

〈15〉 ソコイ タテットレ（そこに立っていろ！全）

〈16〉 ソコイ タチットレ（平地分）

〈17〉 コノイヌ タチッタラ コドモノ セタケ アルデヨ（この犬、後肢で立つと、子供の身長ほどもありますよ。平地分）

〈18〉 ダレ タチットラーヤ（誰れかが たたずんでいるよ？ 三名）

3. 「立てる」は全県的であるが、下彩平地分、南方平地分などで壮年層以下に「立ちる」の使用がめだってきた。これが飛石状に「祖谷」、「木屋平」、「木頭」などの山分地方に拡大しかけている。

4 つまり、自動詞「立ちる」は、自他に両用する「立てる」に対して新しくできた用語であり、今後は、「立ちる」——自動詞・「立てる」——他動詞という分化がすすむものとおもわれる。

5. このような変化の要因は、共通語の「立てる」が他動詞であるということからの影響であろうが、前記の分化が、まず都市部にあらわれ、つづいて山分におこったという現象も注目されねばならない。

(15) 「満ちる」、「みる」、「満つ」

1. 漁業関係の海岸より地方では、「潮が満ちる」を「みる」のように用いることがあり、南方にこの傾向がいちぢるしい。

2. 「みる」は、両南市海岸地方では五段に活用し、海分B6(上灘)海岸地方では上一段に活用する。これに対し海分B7(下灘)海岸地方では、上一段と五段に両用している。

〈19〉シオガ ミンウチニ イヌケ(満潮にならないまえに帰りますか 日和佐)

〈20〉シオガ ミッテ キヨルゼ(満潮になったよ 鳴門市土佐泊)

〈21〉シオガ ミッリヨ ルゼ(同上 牟岐)

3. これらは、いずれも命令形を欠いている。

4. また、五段「満つ」は人数、年令、数量などの場合に用いることがあるが、未然形を慣用する程度で、連用形、終止、連体形はほとんど用いない。また、その他の活用形を欠いている。

〈22〉オーボシヤガ ジューゴニンニモ ミタナンダンジャッチューワ(応募者が15人にもならなかったのだということだよ)

(16) 「死ぬ」、「死ぬる」その他

1、ナ変「死ぬる」は北方山分で一般的であるが、当地方の若い世代は五段、変格の両活用を用いている。

2、また、上郡平地分や下郡里分、南方山分などでも、年配層がナ変を用いることがある。五段活用の場合よりも表現が感情的のようである。

〈23〉ホンナモン　クイヨッタラ　シヌルンゾ（そんなものを食べると、死ぬんだよ！　勝）

3、本県におけるナ変の特色は、終止形が連体形と同じく「死ヌル」であり、また、仮定形は「死ヌリャー」ではなく、「死ニャー」である。

4、「死ぬ」の尊語として、下一段「ほくる」があり、また、南方山分、里分その他では下一段「とれる」が成年層に用いられる。

また、尊敬語として、五段「のーなる」が平地分で用いられるほか、山分、上郡平地分、上郡里分では、年配層が下一段「（お）みてる」を用いることがある。

(17)「煮る」、「煮える」

1、上一段「煮る」はほとんど用いられないが、複合語としては、下一段「煮つける」、「煮しめる」のように用いる。

2、本県では「煮る」の代りに、五段「たく」、「ゆがく」、下一段「いでる」を適宜用いている。

下一段「煮える」は　ときどき用いられるようである。

(18)「干る」、「ひく」

1、上一段「干る」は、北方山分の成年層が用いる程度でその他の地方では、五段「干あがる」、「干ぼしになる」、下一段「干ぬける」、「干われる」などのように、複合語として用いるだけである。

注　別図　NO.3 参照

〈24〉タンボガ　ヒンヨーニ　ヨーミテオクレヤ（田んぼが干あが

らないように、よく世話して下さいよ。三名）

〈25〉コー　テッタラ　イカナ　フケタデモ　ヒルゾヤ（こんなに雨が降らないと、いくら湿田でも乾いてしまうよ。三名）

2. 「干る」の命令形は、ないようである。

3. 五段「ひく」は全県的に用いている。

(19)「かびる」

1. 上一段「かびる」は、「黴がはえる」の意である。年配層が用いることがあり、とくに上郡地方で比較的多用されている。

2. 一般的には、「かびしが（は）（え）る」、「かびがくる」、「かびがねる」などのように用いる。

(20)「しみる」、「しむ」

1. 五段活用が一般的で、「しむ」、「しゅむ」などが用いられている。

〈26〉アセガ　メニ　シュムワー（汗が目にしみるよ！　勝）

〈27〉チョット　タカスギテ　メニ　シュムガナ（値段がちょっと高くて、都合が悪いね。同）

2. 都市部の女子青年層は上一段「しみる」を用いることもあるが共通語的な変化であろう。

(21)「ある」、「おる」

1. 本県では「居る」をほとんど用いない。五段「おる」が一般的で、生物が主語の場合に用いている。

2. 「ある」は、主として無生物が主語の場合に用いる。主語が人の場合もあるが、やや慣用的である。

〈28〉ゲンキナ　ヒトモ　アルモンジャナー（元気な人もいるものだねえ！　全）

〈29〉アンタ　コー　ナンニン　アルンデ（あなた、子供は何人いるのですか　全）

〈30〉アソコノ　ジーサン　マダ　アルンカイナ（あの家のじい

さんは、まだ健在かしら？（同）

〈31〉アラントカラニ　アッテアッテジャワ（悪くってさ　もちろんあるよ！　同）

3　ちなみに、〈30〉の場合、「モー　ナイワー（死んだよ）のような答え方も多用される。

4　なお、「ある」は、未然形、已然形などが比較的自由に用いられている点も、共通語の場合と異なる。

5　人が主語の場合、尊敬語として下一段「おいでる」、五段「おりなはる」などが平地分都市部の年配層に用いられているが、これについては後記する。

注　〔V〕—(2)—3)・4)　参照

(22)「借りる」、「借る」

1　全県的に、五段「借る」が一般的であるが、都市部女子青年層が上一段活用を用いることもある。ていねいな感じがある。

〈32〉カッタモンワ　ハヨ(ー)　カエシトキヨ（借りたものは、はやくかえしておきなさいよ。平地分）

〈33〉カリタモンワ　ハヨ(ー)　カエシトキヨ（同）

2　上一段活用は共通語の影響であろうが、連用形以外はあまり用いないようである。

3　ちなみに、「借りる」に対応する「返す」は、五段「かえす」「かやす」、「もどす」、「はらう」などを適宜用いている。

これらは、全品、いずれの場合にも用いることができる。

(23)「お帰る」、「おあがる」、「おいでる」その他

1　平地分の年配層がていねい、親愛、尊敬などの表現として、「お行き」、「お行きなさる」などのように、連用形に接辞「お」を用いることがあるが、五段「お帰る」、「おあがる」、下一段「おいでる」などの場合は、接辞の「お」が他の活用形にも用いられる点特異である。

〈34〉ハヨ(ー)　オカエラント　ク〈ラ/ロ〉ー(ニ/ン)　ナリマスデヨ（はやく　お帰りにならぬいとくらくなりますよ　平地分）

〈35〉オトーサン　オカエッタラ　ユーテ　ツカイナ（お父さんがお帰りになったら知らせて下さいね。同）

〈36〉アンタ　マー　ハヤ　オカエルンデ（あなたは、まあ！　はや　お帰りになるのですか？　同）

2. 「おあがる」は、「座敷、居間に通る」、「食事をとる」その他の意味に用いる。

「おいでる」は「いる」、「行く」、「来る」などの尊敬語として用いる。

3. 命令形「お帰れ」、「おあがれ」などは、ほとんど用いないで連用形を用いるが、これらが、尊敬またはていねい語であることからも理解できる。

4. その他、「お入る」も用いられることがある。また、上郡地方の年配層が、下一段「おみてる」を用いることがある。「死ぬ」の敬語である。

5. 三名、祖谷地方の年配層は、「お帰る」、「おあがる」のほかに、「お遊ぶ」、「お休む」、「おたべる」も用いており、慣用の範囲が広いが、今後調査してみたい。

6. さらに、三名、祖谷地方では、五段活用連用形に「テ、タ」などがつくときも、音便化しない点が変っている。

〈37〉キヨーワ　ユックリ　オアンビテ　オカエリヨ。（今日はゆっくり遊びなさいよ。祖谷）

〈38〉オトッツアン　オカエリタカノ（お父さん帰ったかね　同）

(26)「足りる」、「足る」

1. 本稿では、五段「足る」が一般的で、「十分である」、「飽きる」の意味に用いられている。

〈39〉ホレビャーデ　タルンデ（それぐらいで十分なのかい？　全）

〈40〉オマイノ　ユーコトヤ　タリカヤッタワ（お前のぐちなんか聞き飽きたよ　同）

2. 上一段「足りる」は、都市部女子青年層が用いることがある。ていねいな感じがある。共通語的な変化であろう。

(25)「ほこる」、「ほだつ」

1. 五段「ほこる」、「ほだつ」は、成青層用語で、車輌の疾走や突風のために、路面その他から塵埃がまきおこる場合に用いる。

2. 「ほこる」は「ほこり ― 塵埃」の動詞化であろうか。
五段「ほだつ」は、全県的に散在して用いられている。各地に、「ほこりたつ」、「ほこりだつ」などが用いられることからみてその省略によるものと思われる。

3. これらの命令形は、放任用法がわずかに用いられる程度である。

4. ちなみに、五段「ほこる」は野菜類の成長繁茂する状態にも用いており、さらに、北方山分では、蜂類がさかんに飛び交うことにも用いる。

(26)「召集なる」、「終戦なる」その他

1. 「漢語＋なる」型の五段動詞が、都市部を中心に、全県的にかなり用いられている。「～になる」が「～なる」となったのであろう。

〈41〉シャンハイデ　ゲンチショーシューナッテネー　カンコーデ　シューセンナッタンデスワ（上海で現地召集せられてね、漢口で終戦になったのですよ。小松島）

2. 前記文例からみると、「漢語＋なる」は、「召集なる」―「召集せられる」のような受身的な場合と、「終戦なる」―「終戦になる」のような結論的な場合とがある。

3. 受身的な用語が多いようで、「退校なる」、「実施なる」、「決定なる」など、比較的自由に用いられている。
命令形は用いないようである。

(27)「まがる」

1. 五段「まがる」は「曲折する」、「じゃまになる」の二つの意味に用いられている。

〈42〉アノ イエガ マガッテ ミエンデー（あの家がじゃまになって、むこうが見えないじゃないですか 全）

〈43〉ソコ マガッタラ スグ ツキアタリデッ（そこの道を横へ行けば、すぐ 向うが目標の家です 筑）

2. 共通語的な「じゃまになる」が若い世代に比較的多用されているので、「まがる」は上記二つの意味のうち、方言的な面を失って「曲折する」の意に固定していくのではなかろうか。今後興味のある問題点といえる。

(28)「失う」、「うせる」その他

1. 五段他動詞「うしなう」は、「なくする」のていねい語として、平地分を主に全業的に用いられる。その他一般的用語としては、「ないようにする」、「のうならす」などがあり、また、地域によってはいろいろな用語がある。

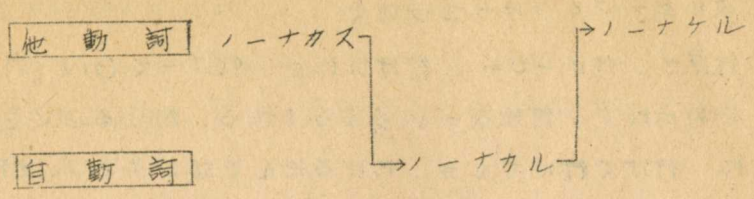
2. 五段他動詞「うすねる」、「うしねる」などもていねいな用語で、北方地方の年配層が用いる。

3. また、北方では、海岸地方 C5、C6 をのぞいて五段「なしにする」が多用される。さらに下郡地方 C4、C5 では、五段「のうなす」、「のうなかす」、下一段「のうなける」などが用いられている。

4. 「のうなかす」は分布状況から及て、「ノーナラス」→「ノーナース」→「ノーナス」→「ノーナカス」の変化と思われる。「ノーナス」→「ノーナカス」の変化は「ダマス」→「ダマカス」「トリテラス」—「トリテラカス」など、本県に多くみられる変化の一つであろう。

5. 下一段「のうなける」は分布状況からみると、つぎのような対

応関係からできたようである。



6. 自動詞としては、五段「なしになる」、「ないようになる」、「なよなる」、「ないなる」、「の－なかる」、下一段「うせる」などがある。

7. 「なよなる」、「ないなる」などは南方山分で用いられている。その他の使用地方は、他動詞の場合と同じである。
なお、「の－なかる」は「ののかる」のようにもなるが、「の－なける」とともに、仮定形、命令形はないようである。

8. 下一段「うせる」は、隠語として成年男子が用いることがある。「なくなる」、「行く」、「来る」の意味があり、山分よりも、平地分、里分で比較的多用している。

〈44〉ワシノ クツガ ウセヤガツタワ（わしの靴がなくなったぞ？ 賜）

〈45〉アイツガ ウセテモ シランカオ シトケヨ（彼が来ても相手にするなよ 同）

〈46〉アイツ ホンマニ ドコイ ウセタンカイナ（彼は いったい何處へ行ったんだろう？ 同）

〈47〉トットト デテウセー（はやく出て行ってしまえ！ 同）

(29) その他

1. 五段動詞は「行く」→「行ける」のように、下一段可能動詞を派生する。

2. ちなみに、本県ではつぎのような可能表現がなされている。

〈48〉行ける、（行けれる）、（起きられる）、起きれる、（起きれれる）、（こられる）、これる、（せれる）、できる。

〈49〉よー行く、　そー行く

〈50〉あじよー行く、けっこう行く

〈51〉行けざ、行けーじゃ、行けいじゃ、行けーで(か)　行けんと(からに)、行けるっ(ちゅう)たら、行けるっく(ちゅう)ー〉に、行けて行けてじゃ、行けるだんでない(わ)、行けるだんか、じゃら行けじゃ、　これらについては、別の機会にふれたい。

〔IV〕活用形と表現

助動詞その他と関連した形態上の変化を主としてみていく。

(1)　未然形

1)、否定表現の場合

1　五段活用上一段活用などの表にしめすような否定表現が用いられている。

2.「置カん」型は全県的であるが、山分で多用し、平地分では使用度が低い。

「置ケ(ー)へん」型の使用傾向は「置カん」型と逆であり山分での使用はきわめて低い。

また、海分では「置ケ(ー)へん」型よりも、「置カ(ー)へん」型を多用している。

「置カ(ー)へん」型は南方平地分Cr、Cqでも少用するようである。

3　「置キャ(ー)へん」型は、里分、平地分の年配層が用いているが、使用度はあまり高くない。

「置キャ(ー)せん」型は、下郡平地分、南方平地分などの都市部をのぞき全県的であるが、使用度はさらにおちる。ただし、山分、上郡、漁業関係地区では、比較的用いられるようである。

4. 一段系動詞が、「起キラん」、「寝ラン」などのように、ラ行五段活用化の方向をしめす場合がある。南方山分、南方里分（宮浜）、下郡里分（上分上山）、海分Bク（下灘）などで、その他の山分、里分、南方地分C？海岸地方などでも、この傾向がみられた。

〈S2〉ハヨ（ー）オキラント　オクレルゼ（はやく起きないと置別するよ　宮浜）

5. ラ行五段化の方向が、どのような動詞から進むかは今後の調査にゆずるが、ラ行上一段、ラ行上一段などが、もっとも五段化しにくいことは興味がある。

6. また、上記〈宮浜〉より上流の山分では「消エラん」、「見エラん」、「潰エラん」などが「ケラん」、「ンメラん」「ツブラん」のように用いられている。ただし「冷エラん」、「煮エラん」などが「ヘラン」、「ネラん」のようにはならない。

7. なお、南方平地分、海分などで、否定の「……へん」が「……エン」になることがあり、さらに、上一段動詞につづく場合、「……イン」になることもある。漁業関係地区に多いようである。

8. その他、否定表現には、つぎのような変った形式もみられるが、動詞未然形の形態変化には関係がない。

注　別図 NO.5 参照

〈S3〉行カざった（行かなかった。　山分、海分老年層、海分下浦老年層、上郡平地分老年層）

〈S4〉行カだった（同上　南方山分）

行カやった（同上　南方平地分）

行カんかった（同上　平地分都市部）

行カんだ（同上　海分下灘）

行カな（ー）や　（行かないよ。海分下灘、三好郡笹焼地、

阿山城）

行カっと（行かないと。　海分）

行カーでも（行かなくても。下部平地分C4, C5, C6の一部）

行カ〈ん／い〉でも（同上　全果）

行カんずく……（行かない〈まま／で〉全果）

2) 使役表現の場合

1. 宮城氏の研究でも明らかなように、本果における使役助動詞は「す」、「さす」が一般的で、「せる」、「させる」はあまり用いない。

注　徳島方言概観

2. 上一段、下一段、カ変、サ変などが、それぞれ「起キラす」「受ケラす」、「コラす」、「セラす」、「シラす」のようにラ行五段活用化の方向をしめす場合が多い。この傾向は、上部平地分をのぞき全果的にいちじるしい。

3. なお、サ変「する」の使役表現は上部平地分で「さす」であるが、他の全地域では、「さす」とともに「セさす」、「セラす」、「シラす」などを比較的多用している。

〈55〉センセ（ー）ニ　シラサレテ　モー　ヨワッタゼ（先生に仕事をさせられて、ほんとうに困ったよ。　鳴門市瀬戸）

〈56〉コンダ　オラニ　セサセテ　オヤリヤ（今度は私にさせて下さいよ　祖谷）

4. ところで、平地分都市部で「行かさす」、「言わさす」のような用い方をする場合がある。「行カサす」、「行カさす」のいずれにとるかはともかく、説得性の強い感じを持っている。

その他南方平地分C9の海岸地方で「起キやす」のような使役表現もきかれた。

3) 受身表現の場合

1. 受身の助動詞「れる」、「られる」が用いられており、共通語の場合と変らない。

2. 五段「ある」やラ変動詞などは、その性格上受身表現にならない。

3. 接続関係の上で、動詞未然形の形態変化をおこさせるような例はみられない。

4) 可能表現の場合

1. 可能の助動詞「れる」、「られる」が用いられているが、接続関係がやや複雑である。これについては前記したが、未然形の形態変化と関係がないので省略する。

注 〔Ⅲ〕の(29)参照

2. 平地分では、「来られん」、「見られん」、「せられん」などのように、不可能表現で禁止用法がなされる。親愛の情をこめた女子系用語である。

注 別図 NO.5参照

5) 尊敬表現の場合

1. 尊敬の助動詞「れる」、「られる」は、平地分の都市部で用いられるが、使用度はあまり高くはない。
また、山分、里分などで、「来(キ)られる」、「為(シ)られる」のように、連用形に接続する場合もあつたが、いずれも使用度が低い。

2. 「書カんせ」、「見んせ」、「見さんせ」、「来(コ)んせ」、「来(キ)さんせ」など、「んす」、「さんす」が、山分をのぞく各地で用いられている。海分B6(上海)、南方里分、南方平地分で比較的多用されているが、都市部での使用は急速に低下している。

注 別図 NO.5参照

3. また、「書カされ」型が南方山分に、「書カしゃれ」、「見

さつしゃれ」、「来(こ)さつしゃれ」、「来(き)さつしゃれ」など、「っしゃる」、「さつしゃる」などが山分、上郡里分で用いられている。下郡里分、南方里分、海分下灘などでも各地の古老や年配層が伝えていることから、かつて使用したことは明らかである。

注　別図　NO.5参照

4. これら尊敬の助動詞は動詞未然形に接続するが、いずれもその形態変化に関係がないのでくわしくはのべない。命令形を多用するが、その他はあまり用いないようである。

(ス)連用形

1) 連用形命令法

1. 女子系用語として、下郡平地分、南方平地分などの都市部で比較的多用されている。

上郡平地分、海分その他里分地方でも用いるが、接辞や助詞をつけてニュアンスをしめす場合が多い。

注　別図　NO.4　参照

〈57〉行キ(ー)……下郡平地分、南方平地分その他

〈58〉行キ(ー)〈よ、だ〉…平地分、海分(上灘)

〈59〉(お)行キ〈で、でや〉……上郡平地分

〈60〉行キ〈ない、な、よ、や〉…平地分、里分、海分は少用

〈61〉行キ〈ほら、ほれ、ま-、さ(ー)、はい〉…海分、海岸地方漁業地区

〈62〉行キ〈やん〉…伊島、阿南市漁業地区

〈63〉行キ〈っちゃ〉…平地分、里分ともに少用

2. 上記のうち、〈60〉「(お)行キな」は「(お)行キないな」とともに、上郡平地分(主として C1)南方平地分(C9)などで年配層の禁止表現にもなっている。

「(オ)行キナ」----(命令)、「(オ)行キナ」---(禁止)のように、アクセントの区別があるようだが、若い世代は命令表現だけに用いており、アクセントは「行キーナ」、「行キナ」などである。

3. このような混乱は、海分B6(上灘)地方にもみられ禁止、命令の表現や認識が個人により異なる場合が多い。これについては今後とも注意観察の要がある。

4. 〈61〉は、それぞれニュアンスを表現するが、命令形の項に後記する。

5. 〈62〉は、「行キやれ」の音便であろうか、使用状況について、さらに調査してみたい。

6. なお、三好郡山分地方で、つぎのよう表現が比較的多用せられている。 注、別図 No.4 参照

〈64〉 コレ オヤリヨ(これを下さいよ。)

〈65〉 コレ カイテ オヤリヤ(これを書いて下さいよ。)

〈66〉 コレ カイテ オヤリマイカ(これを書いて下さいませんか)

〈67〉 コレ カイテ オヤリルカエ(これを書いて下さいましようか)

7. つまり、「おやり」は話し手が相手に対してあげるのでなく相手にしてもらう場合の表現である。
当地方は「くれ」、「おくれ」も用いているが、「おやり」がていねいである。

8. 〈66〉、〈67〉は年配層のていねい表現で〈67〉は祖谷、三名などで用いられる。

9. なお、〈67〉の「オヤリル」は変った用法であるが、他に「オ行キル」型のようには用いない。
むしろ、「オヤレル」→「オヤリル」の変化現象ではなかろうか。

2) 助動詞「ます」、他の動詞につづく場合

1. 共通語の場合と同じで、特別な形態変化はみられない。

2. ラ変動詞は平地分都市部で比較的多用されているが、山分、里分、海分では、公式の席上や共通語的なていねいな会話以外は用いない。

3. 平地分都市部ではイ音便化するのが一般的であるが、老年層のていねいな会話の場合、「ナサリます」のように音便化しないで用いることがある。

3) 「おる」、「よる」につづく場合

1. ていねいな発音の場合は「置キよる」、「漕ぎよる」が一般的であるが、普通は、平地分、里分で「オッキよる」、「コンギよる」のようになる。そして山分では、「オキ$_{よ}$る」、「コギ$_{よ}$る」のようになりやすい。

また、「山城」、「祖谷」などでは、「オキ$_{よ}$ーる」、「コギよーる」のようになることもあり、サ変「する」の場合は「シ$_{よ}$ーる」となるのが普通である。

2. 上郡地方では、男子年配層が語気するどく発言したり、あるいは並に冷淡に話す場合、「----オル」を用いることがある。

3. サ行五段動詞が、「出ヒよる」型になる場合もときどききかれる。上郡平地分をのぞく各地で、とくにサ行五段イ音便の多い地方である。

4. ラ行五段、ラ変などの動詞が、「降イよる」のようにイ音便となる場合がある。下郡平地分、南方平地分、海分の若い世代にいちじるしく、下郡里分や南方里分にも、この傾向がおこりつつある。また、上郡地方C₁、A₃にもそのきざしが及られる。

注 別図 NO.3 参照

5. 前記イ音便現象が、ラ行上一段動詞にもおこる傾向がある。

〈鳴門市〉、〈小松島市〉などの両立地方で、若い世代が「イよる」を用いることがある。

6. 無雑作な発音の場合、アワ行五段「言う」が「イよる」のように長音便となることがある。海部郡では、すでに一般的である。

〈68〉 アトカラ イク(ー) イヨライネ(あとから行くと言っているよ。牟岐)

7. 上一段「着る」を「キーよる」のように長音便ないしはイ音便にする場合が全県的にときどきある。

また、山分、海分で下一段「蹴る」を「ケーよる」にすることもあり、さらに、山分、海分及び下郷で一段系の「似る」、「見る」、「寝る」などおも、長音便ないしはイ音便にする傾向がある。

8. なお、平地分では「……よる」、「……やる」、「……とる」などの感嘆形を「……ヨ——」、「……ヤー」、「……トー」のように謝音する場合が多い。

4) 「て」、「た」などがつづく場合

共通語的な音便以外に、いろいろな変化をおこす地方がある。

① イ音便、ヒ音便

1. サ行五段動詞がイ音便、またはヒ音便になる地方が多い。つぎの12語について全県調査し、適宜他の語についても考慮した。

〈69〉「貸す」、「傘をさす」、「仕事をさす(させる)」、「ゆびさす」、「出す」、「泣かす」、「離す」、「動かす」、「目を覚ます」、「起こす」、「探す」、「若す」、「冷やす」

2. 「傘をさす」、「ゆびさす」などは、上郷平地分、南方平地分のみをのぞく全県下でイ音便になりやすく、年配層は

どこの傾向が強い。

3. 全般的にイ音便化しやすい地方は、つぎのようである。

注 別図 NO.3参照

(イ) 北方山分……A_2, A_3, A_4

(ロ) 南方山分……A_1

(ハ) 上郡里分……B_1, B_3

(ニ) 下郡里分……B_4（玄野より上流）

(ホ) 南方里分……B_5（上勝）

(ヘ) 海分……B_7（下灘）

(ト) 上郡平地分……C_2〈江原（清水、拜原地区をのぞく）〉

(チ) 下郡平地分……C_3（都市部は少用）

(リ) 南方平地分……C_4〈阿南市（椿泊）〉

4. 以上のうち、〈三名〉、〈祖谷〉、〈椿泊〉、〈宍喰〉、〈川上〉などでは、「落ちた」のようにチ音便になりやすい。

5. 「さす」、「出す」をのぞく二音節の動詞、「押す」、「貸す」、「干す」などは、前記地方においてもイ音便化しにくい傾向がある。

6. 下郡平地分C_3のイ音便地方では、成年層に比較して、若い世代のイ音便使用度が低い。また、村落地に比較して、都市部のイ音便使用度がきわめて低い。

このことから、当地方でのサ行五段イ音便は、漸次衰退していくものと予想される。

7. 一方、上一段「着る」は、前記したように「キーて」、「キーた」のように長音化するのが一般的で、イ音便化いしは、いわゆる長音便となっている。もっとも、ていねいな会話や緊張した場では、「キて」、「キた」のように共通語と同じになりやすい。

8. 上一段「似る」も、山分、海分B_7で、「ニーて」、「ニ

た」のようにイ音便となるのが一般的である。

山分では、このような傾向が上一段「見る」、下一段「寝る」「出る」、「蹴る」など、二音節の動詞にもみられるが、個人的に多少異っている。

9. また、上一段「干る」も、北方山分で「ヒーて」、「ヒーた」のようにイ音便となるが、「水がひく」→「ヒーて」とも頻重して用いられている。

10. なお、サ行五段動詞が、「出す」→「出ヒよる」のようにヒ音便になることについては前記した。

注 〔IV〕－(2)－(2) 参照

11. さらに、ラ行五段、ラ変などの動詞が、「降りよる」→「降イよる」のようにイ音便化し、ラ行上一段動詞が、「下りる」→「オイよる」のようにイ音便となることについても、すでに前記したとおりである。

注 〔IV〕－(2)－(2) 参照

② ウ音便

1. 本県のアワ行五段動詞が、「買う」→「買うた」、「洗う」→「洗うた」のようにウ音便化し、共通語の「買った」型と対立していることはいうまでもない。

2. バ行五段ウ音便が山分で用いられることがある。〈三名(中)〉〈西祖谷山(吾橋)〉、〈東祖谷山(樫尾)〉、〈一宇(明谷)〉〈木頭(北川)〉など、高知県境地方の老年層が比較的用いるほかは使用度が低い。

注 別図 No.3 参照

〈70〉イチンテ アく ス ソ ー デ ヒモ(ー)タゼヤ(終日、遊んでしまったよ。三名)

3. 語彙の面では、「結ぶ」、「遊ぶ」、「飛ぶ」、「運ぶ」、「呼ぶ」、「喜ぶ」など、ウ段音、オ段音のくる語がウ音便化

しやすく、「並ぶ」のようなア段音の入る語がウ音便化しにくいようであるが、個人によつて更なり決定的ではない。ちなみに、「並ぶ」型は「ナ〈ラ〉ーだ」のようになる。

4. さらにマ行五段ウ音便が前記地方で用いられている。

注 別図 No.3 参照

〈71〉サキヨー〈ヌ〉ーデ ヨーテ ヒモイリタゼヤ（酒を飲んで、酔ってしまったよ、三名）

5 語彙の面では、「盗む」、「休む」、「飲む」、「読む」、「揉む」などウ段音、オ段音の入る語が音便化しやすく、「病む」、「止む」、「痛む」など、ア段音の入るものが、ウ音便化しにくいようだが、個人によつて更なり、決定ではない。

ちなみに、ア段音の語は、「痛む」→「イ〈タト〉ーだ」のようになる。

③ 撥音便

1. 共通語の場合と同じである。すなわち、ナ行、バ行、マ行がそれぞれ、「死ぬ」→「死ンだ」、「飛ぶ」→「飛ンだ」、「飲む」→「飲ンだ」のようになる。

2. ただ、ラ行五段「戻る」→「戻ッた」、「モンた」のように促音便とともに、撥音便になる場合がある。「モンた」は全県的であるが、南方山分、海分Bヶでは比較的少ないようである。

3. その他、つぎの場合撥音便になりやすい。

〈72〉「死にに行く」→「シンに行く」

〈73〉「取りに行く」→「トンに行く」……ラ行五段動詞にあてはまる。

〈74〉「飲みもつて」→「ノンもつて」……（飲みながら）

「飲んまくる」→「ノンまくる」……（さかんに飲む）

これらはマ行五段動詞にあてはまる。

〈75〉「走りもつて」→「ハシンもつて」ラ行五段動詞のうち、

三音節語におこりやすいが、決定的ではない。

〈ク〉「するでく(は)」→「スンでく(は)」…(しますよ)

終止形が「る」で終る全動詞にあてはまるが、平地分の無雑作な会話にきかれる程度である。また、推量「だろう」がつづく場合も同様な変化がありえる。

注 〔Ⅳ〕—(3)—1 参照

〈ク〉「取るな」→「トンな」…(ラ行のみ)

「起きるな」→「オキンな」、「オキな」

「覚るな」→「ケンな」、「ケな」

「するな」→「スンな」、「スな」

「来るな」→「クンな」、「クな」

終止形が「ル」のつく動詞は、そのすべて撥音便にもなりまた、五段動詞をのぞくと、すべていわゆる畧音便も用いられる。

また、補助動詞「なさる」、助動詞「まい」、助詞「ない」「な」などが動詞連用形に接続する場合も、上記と同様に撥音便となる。

④ 促音便

1. 五段「行く」は、「イッて」型よりも「イて」、「イた」型のように、いわゆる畧音便となりやすい。

2. タ行、ラ行などの五段動詞が、「持つ」→「モッて」、「取る」→「トッて」のように促音便となるのは共通語と同様であるがアワ行五段動詞が「洗う」→「アラッて」とならず、「アローて」とウ音便になることは周知のとおりである。

3. タ行上一段「落ちる」、「朽ちる」、「満ちる」などが、無雑作な会話で「オッて」、「オッた」のように促音便になりやすい。

4. その他、つぎの場合にも促音便になる傾向がある。

〈78〉「書くか（・こ・け…）」→「カッか（・こ・け…）」……カ行五段動詞が疑問表現をつくるとき。

「書きかける」→「カッかける」……（書きはじめる）の場合も同様である。

〈79〉「するで（よ）」→「スッで（よ）」、「スンで（よ）」

無雑作な会話の場合、終止形がるとなる全動詞におこりやすい。撥音、促音のいずれにもなる傾向がある。その他、終助詞「でわ（い）」、「でか（い）」、推量「だろう」が接続するときも同じ変化が平地分でおこっている。

⑤ 畧音便

1. 五段「行く」の畧音便については、前記したとおりである。
2. 無雑作な会話の場合、五段「持つ」、「取る」などが、「モて来い！」、「モて行け！」のように短かく調音される傾向があり、畧音便となることがある。平地分にみられ、また海分ではむしろ一般的でさえある。
3. 無雑作な会話の場合、アワ行五段の音便形が「食う」→「クて」、「クた」のように畧音便となる傾向がある。三音節以上の語にとくにいちじるしい。また、地域的には山分でおこりにくく、海分では、むしろ一般的である。
4. 山分の無雑作な会話で、アワ行五段の二音節動詞が「買う」→「カイよ(ー)る」のように短かく調音されやすく、畧音便に類似した現象をしめす。
5. この傾向は海分地方にもみられとくに「言う」→「イよる」となるのが普通である。
6. また、禁止形に助動詞「まい」助詞「な」の接続する場合、五段以外の全動詞にわたり、撥音便とともに畧音便のおこることについては前記したとおりである。

注 1. 〔Ⅳ〕－(2)－③－〈77〉参照

2. 〔Ⅳ〕－(10) 参照

7　その他、山分地方の年配層が、「取り出す」→「トダス」のように畧音便とすることがある。この傾向は上郡里分にもみられる。

さらに志向形による畧音便があるが、これについては後記する。

⑥　ア　音　便

1　アワ行五段アウ型動詞が、「買う」→「カーて」、「洗う」→「アラーた」のように、アの音便になる場合がある。下郡平地分の未開放部落年配層に比較的多い。

2　ア音便現象は、つぎのような場合にもみられる。

〈80〉「これ、やる（わ）」→「コレ、ヤー」……（これあげるよ）……平地分

〈81〉「わしが　してやる」→「…したる」→「……シター」、「……シチャー」、「……シタン」

これらは、下郡平地分や南方平地分における青年女子系用語である。

3　動詞以外にもア音便に準ずる現象がみられる。

〈82〉ソコニ　アッタダー（そこに、あったでしょう。下郡平地分、南方平地分などの海岸より地方）

注　別図　NO.6　参照

〈83〉カキゼラー（柿だろう→柿じゃないか）！……自明の質問に対する答……日和佐）

⑦　そ　の　他

1　祖谷地方の年配層が、「お帰る」、「おあそぶ」、「おあがる」など、接辞をつけて用いる場合、音便現象をおこさないことについては、すでに前記したとおりである。

注〔Ⅲ〕の（73）参照

2　過去推量の助動詞「……つろー」、「……つろん」、「……

…たろう」などがつづく時の変化は、前記「て」、「た」の場合と同様である。

ちなみに、「……つろう」は山分、里分B2、B4、B5の一部、海分B7で用い、「……つろん」は南方山分で用いる。「……たろう」は里分、平地分、海分で用いるが、最近では「……ただろう」型の進出で、都市部での使用度は低くなっている。

注　別図 NO.5 参照

3. 畳語法による強調表現が全県的に用いられている。

〈84〉ハシッテハシッテ　シタケンド　マニアワナンダデワ（たいそう走って急いだのですが、だめでしたよ。脇）

4. 親愛の情を示す表現に用いられる。

〈85〉ハヨ（ー）キテ（ダー）！（はやく来てよ！平地分）

〈86〉ハヨ（ー）キテン（ダー）（同上　海分）

〈87〉ハヨ（ー）キテイナ（同上　三好郡平地分、同里分）

〈88〉ハヨ（ー）キテヤ（同上　三好郡山分）

5) その他

1. 畳語法による反復表現が全県的にあるが、使用度は高くない。

〈89〉ナキナキ　イッキヨルワ（泣きながら行っているよ。脇）

2. 補助動詞的な「アゲル」、「アガル」などがついて、いろいろな音変化をおこす。山分ではやや少いが全県的な傾向である。

〈90〉『書く』―「カッキャゲル」、「カッキャガル」

『研ぐ』―「トンギャゲル」、「トンギャガル」

『だます』―「ダマッラャゲル」

『持つ』―「モッチャゲル」、「モッチャガル」

『飛ぶ』―「トンビャガル」

『積む』―「ツンミャゲル」

『取る』―「トンリャゲル」

「起きる」－「オッキャガル」

「ねじる」－「ネンジャゲル」

「こクる」－「コイアゲル」・「コンリャゲル」

3. 「オ見」、「オくれ」、「オやり」など、連用形に接辞をつけて親愛の表現をしめす。南方山分、海分などでは、ほとんど用いないが、上郡地方で多用している。

多用地方では「来てオミ」→「キトーミ」のように変化しやすい。また下郡里分では「キチョオミ」のようにもなる。ちなみに、三好郡山分では、「オやり」は「オくれ」と同様、他に対する懇願用語である。

注 〔Ⅳ〕－(1)－2)－〈64〉～〈67〉参照

4. その他、連用形には、「なはる」、「たい」、「たがる」、「そうじゃ」などの補助動詞がつくが、大した変化はない。

ただし、「イりたい」を「欲しい」の意味として、海分上灘、三好郡山城谷、佐馬地、三縄などの幼少年が用いるのは特長的である。

(3) 終止、連体形

1. つぎのような助動詞が接続する。

(イ) 推量 「じゃろ」---全県的、山分に多い。

「やろ」----海分、その他の海岸地方にも少用されるようである。

「だろ」----平地分、とくに都市

「ろう」-----「三名」、「祖谷」、「木頭」

注 別図 NO. 5 参照

(ロ) 様態 「げな」----北方山分、上郡、下郡平地分Cs、同里分Bs、南方山分、

「ようじゃ」----下郡、南方

2. 推量 「だろう」、が接続するとき、撥音、促音などの音変化

をおこすことがある。これについては前記した。

また、<木頭>、<祖谷>、<三名> などで「スルろー」が「スロー」のように変化する場合も多い。

注 〔IV〕－(ス)－③－<ク6>、④－<ク8> 参照

3. つぎのような助詞が接続する。

(イ) 接続 「ト」------全県

「ケン(ド)」------全県

「ケニ」------全県

「キン(ド)」------上郡

「キニ」------上郡

「サカイ(ニ)」------南方山分(旧海部郡)海分

「ヨッテ(ニ)」------海分

「ノッテ(ニ)」------海分

(ロ) 疑問 「カ(イ)」、「カ(エ)」------全県

「ケ」------南方平地分C9、B6、B7、南方里分(鷲敷、相生、宮浜<谷山>)

「コ」------A1、A2、A4、B4、B5、B6

「デカイ」------全県

「デ カ」------北方

(ハ) 感投 「ナ(ー)」------平地分、海分

「ナモシ」------平地分、海分、いずれも少用

「ナ ン」------海分、南方平地分

「ナ イ」------下郡平地分(板野郡)、海分、(下郷)南方平地分

「ニン」------南方平地分(橘)、海分(牟岐)

「ネー」------南方平地分、海分(牟岐)

「ノー」------鳴門市(撫養)、徳島市、富岡を結ぶ平地帯および海分をのぞく地方

(二) 指示　「ゾエ」-----全県（平地分は少）

「ゾヨ」-----全県

「ジョ」-----北分山分、徳島市周辺、海分B7

(上海)

山分地方では男子系用語で、他は

女子系用語である。

「ジョ」の形成過程が異なるとおも

われるが、後の機会にゆずる。

「ゼ」------上郡平地分，上郡里分

下郡里分などをのぞく各地

「ジ」----小松島市（坂野）

「デヨ」---全県（山分は小）

「デワイ」----全県

「デ　ワ」----北方

「ウ　エ」---海分

4　「デカ（イ）」，「デワ（イ）」　などが接続するとき，撥音，

促音などの音変化をおこすことがある。

「デヨ」、「ダロ」などの場合と同様である。

注　〔IV〕－(2)－③－〈76〉

④－〈78〉参照

5 畳語法による強調表現は全県的に行われる。親しみの情をもしめしている。

〈91〉イクイク　ホンニ　イワントテ　イクワダ（もちろん行くよ、そんなに言わなくても行くよ。勝）

(4) 感嘆形

1. 本県のほとんどの地方では、「置クわ」、「置くわい」のように、助詞が識別されるのが一般的だが、三好郡〈佐馬地〉、〈山城谷〉、〈三名〉、海分B〉下灘、南方平地分C〉海岸地方などでは、「置ァー」、「置ァイ」のように融合して、いわゆる感嘆形を形成する。

〈92〉オラ　アンナクー　イカナヤ（おれはあんな所へは行きたくないよ。三名）

〈93〉アトカラ　イカイネ（あとから行くよ。牟岐）

2. 感嘆形は、主語が一人称のとき意志表現になり、その他の場合は感嘆表現をつくる。

3. 補助動詞「……よる」、「……とる」、「……やる」などの感嘆形は全県的に用いている。

〈94〉アンナコト　シヨー（あんなことをしているよ。/平地分、下郡里分）

〈95〉アン（ガ）ナコト　シヨラー（同上　山分）

〈96〉マー　キレーニ　カイト〈ー〉（まあ、きれいに書いて〈あい〉るね！　平地分、下郡里分）

〈97〉マーキレーニ　カイトラー（同上　山分、南方里分、海分）

〈98〉コレ　ヤー（これ　君にあげるよ　上郡平地分、下郡平地分）

〈99〉ワシガ　シテヤー（わしがしてやるよ。勝）

ウチガ　シテ〈ー〉（私がしてあげよう。鳴島）

ウチガ　シタ〈ー〉（同　徳島市、南方平地分）

4. つまり、平地分では、山分、里分などの場合と異なり、感嘆形が撥音、長音などに変化する点が特異である。

5. また、「----やる」型表現の感嘆形は、上郡平地で男子系用語であるが、下郡平地分や南方平地分では、むしろ女子系用語となっており、男子はあまり用いない。

6. なお、前記「----とる」型の感嘆形において長音形式はきわめて感嘆形であり、撥音形式は余裕のある感動をしめすというニュアンスも感じられる。

(6) 仮定形

1. 仮定形による仮定表現は、山分、上郡で多用されるが、下郡平地分、南方平地分の使用度は低下し、年配層が少用するにすぎず、海分での使用度低下はとくにいちぢるしい。

〈100〉 ハヨ(ー) オキリヤー エーノニ(はやく起きればよいのに 上郡)

〈101〉 イキヤ(ー) イケ(レ)ンコトモ ナイナ(無理して行けば、行かれなくもないね 上郡平地分)

〈102〉 イタラ イケ(レ)ンコトモ ナイナ(同平地分、海分)

2. 平地分の若い世代は〈99〉のように過去表現を用いる場合が多く、この傾向が増大しかけている。そして、海分では、過去表現がむしろ一般的である。

3. 一方、仮定形を比較的多用する山分、上郡、里分などでは、一段系動詞や変格動詞を用いた仮定表現が多少変化する場合もみられる。

〈103〉 ハヨ(ー) オキヤー エーノニ(〈95〉と同じ)

4. 以下、次のように両用するわけである。

〈104〉 「受ケリヤー」、「受ケヤー」
「来リヤー」、「キヤー」
「スリヤー」 「シヤー」

そして、ナ変は、「死ヌリャー」型をほとんど用いないで、「死ニャー」を用いている。

5. つまり本来の仮定形のほかに否定形（と同じもの）が用いられたわけであるが、これは「起キリャー」型から「起キャー」型に融合変化したものか、あるいわ、五段動詞において、否定形と仮定形が同じということに類推したものか、よくわからない。

6. また、仮定形を多用する前記地方では、「疑問詞ー仮定形」の呼応表現が多用されている。

〈105〉 コンドラ ナニ カヤー（つぎは、何を買うのかい？ 陽）

〈106〉 アシタ ナンジニ オキリヤー（明日、何時に起きるのかい？ 同）

〈107〉 ホンナコト ダレガ スリャーダ（そんなこと、誰がするものか 同）

7. 前記の呼応はつぎのような表現で全集的に用いるが、平地分 C6、C7、C9 の使用度は低いようである。

〈108〉 コンドラ ナニカウンナ〈ラ〉（今度は何を買うのだい？ 同）

8. 仮定形を多用する地方では、命令形と呼応した放任用法が使われる。

〈109〉 ナキャー ナンボデモ ナケダ（泣くのならいくらでも勝手に泣くがいい！ 同）

〈110〉 クリャー コイダ（来たければ勝手に来るがいいさ！ 同）

〈111〉 キャー コイダ（ 同 ）

9. これらは、「ナキタケリャ‥‥」、「ナキタカッタラ‥‥」などの型で全集的に用いられてはいるが、やゝきびしい表現なので使用度は高くない。

(ケ) 已然形

1. 「コソ―已然形」の係り結び用法はすでに金沢氏が指摘されて

いるが、使用度は漸次低下し、現在では三十代以下の者は用いない。

2 調査資料を集計中であるが、主観的にみて北方地方でも使用度が比較的高いようにおもわれる。

そして、つぎのような用例が、比較的用いられている。

〈112〉 ケケテコソ テガエ ミナ イッショジマガナ（型は違うけれど、（内容は）みんな同じだよ 勝）

〈113〉 クテデコソ、イエ ヨーシマスカイナ（言葉で言うことができるが、実行できるものですか。 同）

〈114〉 クテデ イーコソ〈セニ／スレ〉ヨーシマスカイナ（同）

〈115〉 オドレ ミヨッテミー コンドノ センキョニワ ジママコソ〈セニ／スレ〉オテツダイヤ スルカイ（おのれ みていろ！ 今度の選挙には、じゃまはしても協力なんかするものか。 徳島市）

〈116〉 クスリニコソ ナレ ドクニヤ ナランワ（薬にはなっても、害なんかにはならないよ。 同）

3. ちなみに、県内発刊の「徳島新聞」より、「係り結び」の表現を若干例示すると、つぎのようである。

〈117〉 フンニョウ処理の悩みは、----地方でも程度の差こそあれ、人口密度の高い町では、----

〈118〉 児玉学長を最初にとりあげても、----親近感を増しこそすれ大した筋違いにはあたるまい。

〈119〉 あなたぐらいの年代には、てい度の差こそあれ、自然本能の現われともいえるでしょう。

〈120〉 日本を----知ってもらうために、益になりこそすれ害はない。

〈121〉 阿波の大きな寺は、----これを宿舎に利用こそすれ焼き払う愚はしないはずだ。

4. 以上、話し言葉および文章語から考え合せるとき、本年における係り結び用法には、つぎのような傾向がうかがわれる。

(イ) 五段およびサ変動詞以外は、係り結び用法をつくりにくい。

(ロ) 係り結びは、つぎのように類型化して用いられている。

a) ……コソ五段動詞已然形

b) 体言コソすれ(・セー)

c) 連用形コソすれ(・セー)

5. つまり、上一、下一、カ変、ナ変などの已然形はほとんど用いられず、類型cで表現されるか、または別の表現を用いる。

6. 五段動詞の場合も、すべてが、「コソ一已然形」係り結び可能というよりは、表現内容に応じて、その使用度が異っている。すなわち、「コソーあれ」・「コソーなれ」などが多く、また類型cを用いる場合もある。

7. サ変による係り結びは、類型b)、c)があり、「一コソあれ」型とともに使用度が比較的高い。また、已然形が「スレ」と「セー」の二つある。

8. これらの係り結び用法を、若い世代はつぎのような形式でくずしているようである。

〈122〉クチデコソ　エーケンド　ヨーズルカイ(〈107〉と同じ)

〈123〉クチデワ　エー　〈ケンド / タッテ / テモ〉　ヨーズルカイ(同)

9. 年配層も、強調表現として係り結びを用いるが、一般的には〈119〉、〈120〉などを用いる場合が多い。

10. ちなみに、「コソ」の特別用法として、つぎのような用例があげられる。

〈124〉アゲヨート　オモ(ー)タンジャケンドナー　チョットコソナイデワダ(さしあげようと思っ(て、い)たのですがねえ、みると、少ししかないのですよ。瑞山)

〈125〉 ホンナコタ イゼンデアロ－コソ イマラ イワンゾヨ（そんなことは、昔あっただろうが、現在は言わないよ。 同）

〈126〉 イコー コソ（もちろん行くよ。— 「行くか」という質問に対する答として — 古宮）

〈127〉 オヤナ〈リヤラ〉コソ（ヨ） シテクレルンデナイカ（親であるから してくれるのじゃないか — 全業年配層）

〈128〉 カワイソーニ ヒトノミナラコソ（ヨ）（かわいそうに他人のことだからよいものの。— 全業年配層）

11 上記のうち、〈127〉、〈128〉は「…なればこそ…」の融合した已然形用法の一つであろう。

これら「コソ」の特別用法は、山分、上郡里分、下郡里分、南方里分、上郡平地分などで用いており、貞光川、穴吹川などの流域でとくにいちじるしい。

注、別図 NO、6 参照

南方山分〈木頭〉で、「クエ コソ」—（お食べなさいってば！）の用法もあるようだが、確認していない。

(4) 命令形

1. 本県の平地分女子は漁業地区をのぞき命令形をほとんど用いず前記した連用形命令法を用いる。この傾向は海分にもいちじるしく、また若い地方の女子が命令形を用いるときは、終助詞、アクセントなどで語感をやわらげる。

〈129〉 ハヨ（－） コイ（マー） （はやくおいでなさいよ。海分その他漁業地区の女子。男子の場合はていねい。）

〈130〉 ハヨ（－） コイマー （同。海分男子）

2. 命令形をさける傾向は里分女子にもおこりつつあり、若い世代は連用形命令表現を用いる場合が多い。

3 命令形に終助詞をつけて、ニュアンスを表現する。

〈131〉 行ケヨ……念をおす、親愛

行ケヤ……(・ダ・サ)…軽くうながす、「行ケサ」は海分その他の漁業地区

行ケッチャ(・ッチュー(ノ)ニ・サー)……強くうながす―「行けってば」の意

行ケロ……ていねい―〈三名〉 〈祖谷〉などの老年層

行ケホレ(・ホラ、コレ、コラ)…軽く注意をうながす。―海分、その他の漁業地区

行ケイナ…軽くうながすまたはたのむ―南方平地分漁業地区、海分上雑

これらについては、すでに先学諸氏が報告されている。

注. 1. 阿波方言の文末助詞について―金沢治生

2. 出羽島の方言―川島信夫

3. 阿波言葉の語法―金沢治

4. 阿波方言

4 仮定形と呼応した放任用法については前記したとおりである。

注. 〔IV〕-(6)-8 参照

5. 畳語法による男子系放任用法が全県的にある。主として平地分である。

〈132〉 ナケナケ ナンボデモ ナケダ(勝ってに泣いていろ、いくらでも泣いていろ! 勝)

6. 男子系の慣用表現として禁止用法がある。主として平地分で用いる。

〈133〉 ウソー イエ ハッターッソ(うそをつくな なぐるぞ! 同)

〈134〉 アホー イエ(ばかなことを言うな! 同)

7 その他、命令形は補助動詞を用いて、尊敬、けいべつなどの感情をいっそう強化するわけであるが、これらについては後記する。

(9) 志向形

1. 志向形は、助動詞「う」、「よう」、助詞「いな」、「よいな」などが接続して、意志、勧誘、推量の各表現に関係する。

2. 無雑作な会話の場合、五段動詞による前記表現が、「書コ」、「書コか」のように短縮していわゆる悪音便となることがある。平地分でやや多くみられ、海分ではむしろ一般的でさえある。

3. 上一段動詞の場合、「起キュう」、「起キョう」、「起キよう」、「起キロう」などのようになる。

注 別図 NO. 3 参照

4. 「起キュう」型は、北方山分、上郡里分などで老年層が用いており、南方山分、下郡里分でもまれに用いるようである。

5. 「起キョう」型は全県的であるが年配層用語であり、若い世代は、ていねいな発音で「起キよう」を、普通の場合は「起キロう」を用いる。

6 「起キよう」型は、上郡平地分の若い世代が比較的多用するが、その他の地方ではむしろ「起キロう」型が多用され、ラ行五段活用化への方向をすすめている。

7 「起キロう」型の成立はいろいろ考えられる。

<1,3,5> (イ) 「起キュう」→「起キョう」→「起キよう」
→「起キロう」

(ロ) 「起キルろう」→「起キロう」

い) 「書ク」→「書コう」
「起キル」→「起キロう」

8 (イ)の場合を見ると、本県では、「起キュう」が衰退し、「起キョう」から「起キよう」が分化しつつあるときだから、「起キよう」→「起キロう」の変化を想定できそうによい。

9. （ロ）の場合は、〈三名〉、〈祖谷〉、〈木頭〉などで、「起キルろう」、「起キロう」が共存しているので、平地分の「起キロう」も（ロ）の変化によると考えることができる。
しかし、「起キルろう」は元来推量表現しかもちえないはずで、この点、「起キロう」がもつ推量、意志、勧誘の諸表現を説明できない。

10. 結局、「起キロう」型の成立は、（ハ）におけるような、五段活用への類推ではなかろうか。
現在、山分地方でみられる一段系活用未然形のラ行五段活用化も、同様な類推方式が考えられよう。

11. 下一段動詞は、「受ケョう」、「受ケよう」、「受ケロう」のように用いている。使用傾向は上一段動詞の場合と同じである。

12. サ変動詞は「ショう」であり「シよう」にはならない。
また、意志表現の場合、山分地分で「シロう」のように用いることがある。

13. 勧誘表現の場合、三好郡で特別な助詞を用いて親愛の情を示す。
〈136〉 ハヨ（一） イコイナ （はやく行こうよ C1、B1）
〈137〉 ハヨ（一） イコーヤ （同 A2、A3）
上一段、下一段、サ変のときは、「起キヨーイナ」、「寝ヨーイナ」、「シヨーイナ」のように用いている。

14. ちなみに、推量表現、意志表現などは、志向形によるだけでなく、終止、連体形に助動詞、助詞を接続させて用いることはいうまでもない。これについては、すでに前記した。
注 〔Ⅳ〕－(3)－1 参照

(10) 禁止形

1. 禁止形には、禁止の助詞「な」、打消推量の助動詞「まい」が接続する。

2. 男子同輩間における禁止表現はすでに前記したが、つぎのようになされている。

〈ク〉五段 ------「書クな」

上一段----「起キルな」、「起キンな」、「起キな」

下一段----「受ケルな」、「受ケンな」、「受ケな」

カ 変----「来ルな」、「クンな」、「クな」

サ 変----「スルな」、「スンな」、「スな」

3. つまり禁止の助詞「な」は、本来動詞の終止形に接続するのであるが、五段以外の動詞は慣用作な会話の場合撥音便となって「起キンな」型になる。さらに長音便となって「起キな」型となり連用形接続と同じことになっている。

したがって、これらを一括して把握するために禁止形を設定したわけである。

4. また、女子系のていねいな（もしくは親愛感をしめす）禁止表現としては、つぎのようなものがあり、命令表現との対応がみられる。

〈ハ〉

五段禁止	五段命令
（オ）書キナハンな	（オ）書キナハレ
（オ）書キナイな	（オ）書キナイ
（オ）書キな	（オ）書キナ

5. 「（オ）書キナハンな」型は平地分で一般的に用いるが、里分では使用度がおとる。年配層は接辞「オ」をつける場合が多い。また下郡平地分、南方平地分などでは、「書カれん」、「書イたらいかん」など、他の禁止表現を多用するため、「（オ）書キナハンな」型の使用度低下の傾向がある。

6. 「（オ）書キナイな」型は、上郡平地分C_1、同里分B_2、および南方平地分C_9で女子年配層が用いることがある。

7. 「オ書キな」型禁止表現は前記地方のほか、他の平地分、下郡

国立国語研究所図書館

里分などで、やはり年配層が用いている。ただし都市部では「(オ)書キナ」型命令表現や、「書かれん」、「書キナハンナ」、「書いたらいかん」などの禁止表現が多用されるため、その使用度は極度に低下している。

8. 「書キな」型禁止表現は、「(オ)書キナイナ」型を用いる地方で年配層用語となっているほか、海分地方では若い世代も多用する。

9. ここで問題となるのは、命令表現「(オ)書キナ」型と、禁止表現「(オ)書キな」型が同型であるということである。

10. これを区別するため、三好郡〈豊岡〉周辺、海部郡〈牟岐〉〈由岐〉などで、つぎのように用いることがある。

〈139〉 (イ) 命令

「書キーナ」、「起キーナ」、「ミーナ」、「キーナ」

(ロ) 禁止

「書キな」、「起キな」、「ミな」、「キな」

11. また、その他の各地でつぎのように区別することもある。

〈140〉 (イ) 命令

「書キナ」、「起キナ」、「ミナ」、「キナ」

(ロ) 禁止 「書キナ」、「起キナ」、「ミナ」、「キナ」

12. これらは一般的傾向であり、個人によっては、理解、表現のしかたが異なる場合も多い。

13. 上郡平地分や阿波分などで助詞「デ」を用いて、命令表現に「(オ)カキデ」型、禁止表現に「(オ)カキナデ」型のように区別するのは、この混乱をさけるためにも有効である。

14. また、平地分各地で「書きな」型が命令表現のみに専用される方向をたどっているのは、ていねいな禁止表現として、「書キナハンナ」、「書カレン」、「書いたらいかん」などが定着するのと相関した結果であろう。

15. なお、男子系の「起キンな」、「起キな」型禁止表現と、女子系の「書キな」、「起キな」型のていねいな禁止表現とは、それぞれアクセントがちがうらしいので、その形成過程は別個のものとおもわれる。

16. いずれにしても、本県における禁止表現が、「終止形＋な」から「連用形＋な」と同じ形態になりつつある点が注目される。

17. その他、カ変の場合、未然形接続の禁止表現「コな」が上部平地分の年配層に少用されている。
「クな」よりも、ややていねいである。

18. つぎに助動詞「まい」も接続関係や用法からみて禁止形にまとめられそうである。

〈例〉 五段……「書クまい」、「書キまい」
上一段……「起キルまい」、「起キンまい」、「起キまい」
下一段……「受ケルまい」、「受ケンまい」、「受ケまい」
カ　変……「クルまい」、「クンまい」、「クまい」、「コまい」
サ　変……「スルまい」、「スンまい」、「スまい」、「シまい」

19. 山分、里分、海分では、「書クまい」、「書キまい」を両用するが、概して「書キまい」型を用いる。

20. 平地分でも、山地より地方では「書キまい」型を年配層が用いることもあるが、概して、「書クまい」型である。

21. このように、「まい」が終止形、連用形の両者に接続する理由は、一段系、変格形動詞の接続関係から類推されるのではなかろうか。

すなわち、助動詞「まい」は上一段の場合「起キルまい」→「起キンまい」→「起キまい」のように変化し、一段系動詞

には連用形に接続し、変格系動詞にはそれぞれの文語終止形に接続するのと同じ形態になる。

22. つまり、無雑作な発音の場合の鼻音化が契機となり、撥音便・長音便などの変化を経て、前記接続関係を形成したのであろう。

本県では、ていねいな会話などの場合、「起キルまい」型になることがあるが、一般的には「起キまい」型が用いられている。

「起キンまい」型の鼻音化も、無雑作な会話のさいきくことがある。

23 助動詞「まい」には、つぎのような打消推量、禁止、決意などの用法がある。

〈142〉 モー トシジャケニ ヨーナルマイナー（もう老年だから、よくなるまいねえ　平地分）

〈143〉 モー アンナコト スマイゾヨ（もう、あんなことしないぞ。もうあんなことしてはいけないよ。全県下郡平地分はまれ）

24 なお、助動詞「まい」は現代用語となっており、使用度が低下しかけている。この傾向は平地分都市部にいちじるしく、

「行クまい」の代りに「行かん〈じゃ／だ／や〉ろう」その他の別表現をとることが多い。

若い世代がほとんど用いないことから考えて、「～まい」型は急速に衰退するものと予想される。

〔V〕補助動詞と表現

(1) その I

つぎのものについて、順次みていく。

1. ～ テある
2. ～ おる、～よる、～テおる、～とる、
3. ～ テあげる、～テあんす、～テやる、
4. ～ テしまう、～テすむ
5. ～ テおく、～とく、
6. ～ テみる、
7. その他、

1) 「～テある」

1. ていねいな会話の場合は、「～てある」と発音するが、普通の場合、「～タアル」・「～ター ル」・「～チャアル」・その他を用いており、地方的な使用傾向がみられる。

注、別図 No. 3 参照

〈143〉 キレーニ、カイタアルナ（きれいに書いてあるね、平地分その他）

〈144〉 キレーニ、カイチャアルナ（同、下郡平地分、下郡里分）

2. 「～タアル」・「～ター ル」は下郡平地分、C_5 C_6 南方平地分・南方里分・海分（B_7は少用）・南方山分（木頭をのぞく）などの各地で一般的である。

3. 那賀郡く上木頭（海川）では、「～タル」のようになる場合もある

4. 「～チャアル」・「～チャール」は下郡平地分 C_3、C_4、下郡里分で一般的に用いている。無雑作な会話の場合「～チャル」のようにもなる。

5. 「～テアル」しか用いない地方は、美馬郡・三好郡などの上郡

地方、南方山分〈木頭〉などである。海分B〃下灘地方は、「〜タアル」型とともに、「〜テアル」を一般的に用いている。

6. これらは「〜トル」とともに存在態、結果態をしめすもので、已然形、命令形をのぞいて全活用形が用いられている。

7. なお「〜テアル」、「〜チャアル」、「〜タアル」の使用傾向や分布状況が今後どう変化するかは興味があるが、今後の調査にゆずりたい。主観的には「〜タアル」が増大しているように思われる。

2) 「〜おる」、「〜よる」、「〜テおる」、「〜とる」

1. 「〜おる」、「〜よる」などについては、すでに前記した。
注、〔IV〕−(2)−3) 参照

2. 「〜テおる」は、「〜てオります」のように、助動詞「ます」が接続する場合に平地分で用いられる程度である。普通の場合は、「〜とる」を用いる。

3. 「〜とる」は存在態（結果態）とともに継続態（進行態）にも用いられる。
〈145〉 ユキガゴッツー フットルワ（の雪がすごく降っているよ。 ② 雪がすごく積っているよ。全）

4. つまり本県における継続態、存在態の表現は、つぎのようになされるわけである。
〈146〉

① 存在態 ｛「〜テある」型 ｛〜テアル / 〜タアル / 〜チャアル｝

② 継続態
- 「〜とる」型
  - 〜トル
  - 〜トー（の・な・わ……）
  - 〜トン（の・な・で……）
- 「〜よる」型
  - 〜オル
  - 〜ヨル
  - 〜ヨー（な・わ……）
  - 〜ヨン（な・で……）

5. 「〜よる」・「〜とる」などの補助動詞は、全活用形にわたって用いられているが、感嘆形が地方により異っている。
〈147〉 キレーニ カツキヨー（きれいに書いているよ！ 平地分）
〈148〉 キレーニ カキヨラー（同 里分・海分）

6. 「〜ヨー」型は平地分都市部で用いられ、女子が比較的多用する。「〜ヨン」のようにもなる。
「〜ヨラー」型は三好郡山分・同里分、南方山分・海分などで用いられ、三好郡平地分や南方里分、南方平地分Cなどでも少用する。「〜ヨライ」のようにもなる。
その他の地方では、「〜ヨルワ」である。

7. 平地分都市部では、他の終助詞が接続する場合も、前記のような長音、撥音などの変化がおこることもあり、女子が比較的用いている。

8. なお「書いチヨル」型表現は、三好郡三名（南日浦）、西祖谷（有瀬）、那賀郡木頭（北川）など、高知県境地方で聞かれるが、高知県人との会話に用いる程度で在地的とはいえない。

3) 「〜テあげる」・「〜テあんす」・「〜テやる」……

1. 「〜テあげる」・「〜テやる」はそれぞれつぎのように用いられている。
注、別図 No.3 参照

〈149〉　「書いて　アゲル　」
　　「書い　チャゲル　」
　　「書い　タゲル　」
〈150〉　「書いて　ヤル　」
　　「書い　チャル　」
　　「書い　タル　」

2. 「〜テあげる」型はていねいな表現として平地分で用いられ、とくに女子が多用する。
地方により「〜チャゲル」・「〜タゲル」のようにもなる。
山地より地方や海分では、共通語的な会話以外では用いない。

3. 「書いチャゲル」は下郡平地分・下郡里分などで用いており、使用地区は前記「〜てアル」→「〜チャアル」の場合と同様である。
　注、〔V〕—(1)—ノ 参照

4. 「書いタゲル」は下郡平地分・南方平地分などで用いている。使用地区は前記「〜てアル」→「〜タアル」の場合に準ずるが南方里分や海分などでは使用度がよほど低い。

5. 平地分都市部の女子は、これらの感嘆形を「書いチャー」・「書いチャン」・「書いター」・「書いタン」のように用いることがある。

6. 「書いてヤル」型は全県的に用いている。しかし平地分では同輩以下の男子系用語であり、女子は親しい人以外にはあまり用いない。これに対し山分では男女が共に多用する。
里分でも男女がともに用いるが女子の場合「〜テあげる」型を用いることもあるので使用度がやや低い。

7. ていねいな発音の場合は「テヤル」であるが、方言生活においては「〜タル」、「〜チャル」、「〜テヤル」のようになつて地方的な使用傾向がある。

8. 「〜タル」は下郡平地分 C_5 C_6、南方平地分、南方里分、海分などであり、南方山分は「〜タル」、「〜チャル」を両用している。

9. 「〜テやる」は上郡地方で一般的である。ただし、山分、里分地区では「〜チャル」をむしろ多用するようである。

10. 「〜チャル」は、下郡平地分 C_3、C_4 下郡里分で多用されるほか前記上郡里分や山分などでも用いられる。これらは已然形をのぞ

11. き、全活用形が用いられているが平地分各地で、感嘆形を「〜テヤ」「〜チャー」、「〜ター」のように用いる場合がある。また「〜チャン」、「〜タン」のように撥音になることもある。上郡地方では男子に多いが、下郡南方などでは女子に多いようである

12. 「〜テヤル」、「〜チャル」、「〜タル」などの使用傾向、分布状態がどう変化するかは興味があるが今後の調査にゆづりたい。主観的には「〜タル」が増大しているようである。

13. 「やってヤル」も自然に用いられており、「ヤツテヤル」、「ヤツチヤル」、「ヤツタル」など前記使用傾向と同じになる。

14. また「やる」の特殊な用法についてはすでに前記した。
注. 〔IV〕—(2)—ノ)—6 参照

15. 一方「〜てアンス」は、「〜てあげます」の意であり、平地分都市部で女子が比較的用いている。終止、連体形のほか「〜てアンソ」のように志向形が用いられる程度である。
<151> ホレ シタンソカ (それしてあげましようか。徳島市)

16. 徳島市およびその周辺地で女子系「～テあんす」に対応する男子系「～テやんす」も用いられている。青年男子の親愛のこもった用法である。

17. 「あんす」、「やんす」は動詞としても用いるが、終止、連体形と志向形しか用いない。

4)「～テしまう」・「～テすむ」

1. 「～テしまう」は、つぎのような変化形が用いられている。

<152>　「～テ シマウ」
　　「～テ ヒマウ」
　　「～テ マウ」

2. ていねいな発音のさいは全県的に「～テシマウ」になるが、無雑作な会話の場合地方によって使用傾向が異る。

3. 「～テマウ」は下郡平地分 C_4.C_5.C_6・南方平地分、海分などで、主として男子が使用している。

4. 「～テヒマウ」は上郡地方をのぞく各地で用いるが、「～テマウ」を用いる海岸より地方では主として女子系用語となっている。これに対し南方山分、南方里分、下郡里分では、男子が比較的多用しており、女子は「～テシマウ」も用いている。

注、別図 No. 3 参照

5. 上郡地方ではつねに「～テシマウ」が用いられており、「～テ(ヒ)マウ」型は上郡山分地方 A_2 でわずかに用いられるにすぎない。

6. これらの使用傾向が今後どうなるかは興味のある問題点であるが、平地分地方で年配層に「～テシマウ」の使用度が高いのに反し、若い世代に「～テ(ヒ)マウ」の多いという傾向は注目される。

7. なお「しもうて　シマウ」およびその変化形も自然に行われており一般的である。

8. 「〜テすむ」型も一般的であり「済んでスム」の表現も自然に行われている。

9. また「〜テしまう」型は全活用形が用いられているが、「〜テすむ」の命令形はほとんど用いないようである。

5)「〜テおく」・「〜とく」

1. ていねいな会話では「〜テおく」が用いられるが、普通は「〜とく」が一般的である。

2. 「〜チヨク」のような変化は、三好郡三名（南日浦）・西祖谷山（有瀬）、那賀郡木頭（北川）などの高知県境地方できかれるが、高知県人との会話に用いる程度で在地的とはいえない

3. 「置いてオク」・「置いトク」などの表現も自然になされている。

6)「〜テみる」

1. 「〜テみる」も多用される表現である。

2. 本県の某製薬会社のキヤツチフレーズに「聞いてミテミ、つけてミテミ」という表現があるが「見てミル」は自然に用いられており、「聞いてみてミル」型もそれ程不自然には感じない。

3. なお上郡平地分、同里分、下郡平地分、同里分、南方平地分などで「〜てオミ」型が用いられている。もちろん「見てオミ」の表現もなされる。

4. ただし「〜テおみ」型は平地分都市部では年配層が年少者に少用するにすぎず使用度の低下がいちじるしい。これに対し、

上郡地方では比較的多用されており、上郡里分では中学女子も用いている。

〈153〉 オマエラヨ　チヨツト　キテオミ（あなたちよつときてごらんよ。三縄「出合」）

5. なお多用する地方で「キトーミ」・「キチョーミ」のように用いることについては既に前記したとおりである。

注 〔IV〕—(2)—5)—3 参照

7) その他

1. 「走りま——る」・「廻りま——る」など「〜まわる」型が「さかんに〜する」の意味で用いられている。

2. また、「走りぬく」、「泣きぬく」など「〜ぬく」型も「〜まわる」型と同じ意味で、その程度が甚だしい場合に用いるが平地分での使用度は低く里分・山分で比較的多用される。なお「ぬきヌク」は用いない。

3. その他、「走りまくる」・「食いさがす」など、いろいろ用いられているが割愛する。

(2) その II

すでに諸先学の研究や報告があるが一応つぎのものについて順次考察する。

1. ござる。　ございます
2. ごろんじやる。　ごらん
3. おじでる
4. なさる
5. くれる。　くださる。　つかさる。　たもる。　はいりよう
6. かます。くさる。けつかる。さらす。やがる。
7. その他

1) 「ござる」、「ございます」

1. 「ござる」は助動詞「ます」が接続して「ございます」の形で用いるのが一般的であるが、山分、里分などの一部地方では単独でも用いている。

<154> ハヨ コッチー ゴザラッシヤレ（はやくこちらへおいでなさい。木頭）

<155> ～サンガ ゴザッテノー（～さんが来られてね。同）

<156> マタ ゴザレヨ（またおいでなさいよ同

<157> ヤスンデ ゴザレヨ（休んで行きなさいよ。）

2. 「ござる」は、山分老年層のていねい表現として用いられることがある。北方山分での使用度はきわめて低いが、南方山分、とくに那賀郡木頭（西字より西部）では、壮年以上の男女も比較的多用している。

3. また、美馬郡端山・名西郡上分上山など里分地方の古老たちも用いることがある。

4. 連用形、命令形以外はほとんど用いられない。なお金沢氏によれば、前記<157>のような補助動詞用法も用いられている。
注、阿波言葉の語法

5. 「ございます」の用法は共通語の場合と同様である。平地分都市部の成年層は多用しているが、里分におよぶほど使用度が低い。そして山分では共通語的な会話以外には用いない。

6. 地方により、つぎのような用い方がみられる。

<158>

(イ) 「ゴザリマス」……平地分、中年以上の女子が用いることがある。「ゴザイマス」よりもいっそうていねいである。

(ロ) 「ゴワス」、「ゴアス」……上郡、下郡などの平地分で男子

老年層が用いることがある。

(ハ) 「グワース」、「ガース」……平地分、里分などで壮年以上のものが用いる。男子が比較的多用する。

(ニ) 「ゴザンス」……三好郡三名、祖谷などで、男子年配層が用いることがある。

(ホ) 「ガンス」、「グワンス」……(ロ)・(ニ)の地方でまれに用いられることがある。

2) 「ごろんじやる」、「ごらん」

1. 「ごろんじやる」は主として平地帯老年層のていねい表現である。下郡平地分、南方平地分などの女子老年層がまれに用いることがある。

<169> ホレ シテゴロンジヤレナ (それをしてごらんなさいよ。板西)

2. 単独に動詞としても用いられ、また「見てゴロンジヤレ」のような用い方もある。「ゴランジヤレ」になる場合もある。

3. 使用度が低いため、分布状況がはっきりしないので、今後のくわしい調査にゆずる。なお「ゴロンジヤレ」は命令形、終止、連体形しか用いないようである。また、これについては、すでに金沢氏がまとめられている。

注、阿波言葉の語法

4. 「ごらん」は動詞性名詞であるが、一応ここに加えることにする

5. 前記「ごろんじやれ」と同じで主として平地分都市部におけるていねいな親愛表現である。中年女子が幼少年層に対して用いている場合が多い。

6. 「見てゴラン」、「ゴラン」なども自然に用いられている。

3) 「おいでる」

1. 共通語の場合と同じく「居る」・「行く」・「来る」の尊敬語として平地分都市部で用いられている。

2. ていねいな会話に使用されるため男子よりも女子の使用度が高い。その他の地方ではあらたまった共通語的会話に用いるだけである。

<160> ソロソロ オイデマヘンデ(そろそろでかけませんか。)

<161> アンタ モツテオイデナハルンデ(あなたお持ちになっているのですか。)

<162> ドコイ イキ オイデルカノ(どこえおでかけですか。祖谷)

3. 補助動詞の場合<161>のように「〜てオイデル」となるのが一般的であるが、三好郡三名・祖谷(深淵をのぞく)などでは、老年層が「行きオイデル」のように用いることがある。しかし、「読みオイデル」・「書きオイデル」などのようにその他の動詞連用形にはつうかない。

4. なお、平地分では「おいでてオイデル」(おいでておられる)のような用い方もときどきなされておりたいして不自然ではない。

4) 「なさる」

1. 「なさる」は共通語の場合と同じく動詞連用形に接続して尊敬ないし親愛表現となる。

2. 平地分で多用されているが、里分、海分では少なく、山分ではほとんど用いない。

3. 「ナサル」・「ナハル」が両用されている。前者はややあらたまった感じがあるが、後者はむしろ親しみの感じをしめす。

<163> ハヨ(ー) (オ)イキナハレヨ(はやく(お)ゆきなさいよ。勝)
<164> ハヨ(ー) (オ)アガリナシテダ(はやくめしあがって下さいよ。同)
<165> ハヨ(ー) (オ)タベナハンセダ(同)

4. 全活用形が用いられるが、連用形は「ナサイます」、「ナサリます」、「ナサリよる」、「ナサッリよる」、「ナサンリよる」「ナサッて」、「ナシて」、「ナサリます」、「ナサイます」などのようになる。
また命令形は「ナサイ」、「ナサレ」、「ナハレ」などとなるが、「ナハイ」は用いない。いずれも音便化しない場合がていねいである。
なお「行キナ(イ)」なども「なさる」の命令形から変化したものであろう。

5. ラ行五段動詞に接続する場合、「(オ)取んナハル」のように撥音便となる

5) 「くれる」、「くださる」、「つかさる」、「たもる」、「はいりよう」

1. 「くれる」は下一段、「はいりよう」は動詞性名詞である。他は五段に活用する。

2. 「くれる」は、動詞・補助動詞ともに全県的に用いており、已然形をのぞく全活用形がある。補助動詞の場合は、「〜テくれる」のようになる。
<166> コレシテクレルデ(カ・コ・ケ)(これをしてくれますか)
<167> コレシテオクレヤ(これをしてくださいよ)

3. 「(ー テ)おくれ」は平地分では老年層が少用する程度であるが、里分地方ではていねいな表現として比較的多用している。多用地方では「〜トオクレ」のようになることがあり、また下郡里分では「〜チヨ(オ)クレ」のようにもなる。

4. 北方山分地方A2.A3でもていねいな表現として「～テおくれ」をかなり用いるが、むしろ「(～テ)おやり」を使用する場合が多い。

5. 南方山分、海分などでは「(～テ)おくれ」をほとんど用いず、「(～テ)くれ」である。

6. 「(～テ)くださる」は、平地分都市部で共通語的な会話の場合に用いている。婦人の使用度が高い。連用形に助動詞「ます」が接続する場合、および命令形をのぞいて、老年層が「クダハル」のように用いることもある。

7. 「(～テ)つかさる」型は、平地分の年配層が多用している。男子の使用度が高く「(～テ)つかはる」のようになるのが一般的である。ていねい感もあるが、また親愛感もしめす。

<168> コレ ツカハルデ(これをくれますか。脇)

<169> コレ オカキツカハリマスデ(これをお書き下さいますか。同)

<170> コレ カイテツカハレヘンデ(同)。

8. つぎの動詞の場合、<169>の「オ……ツカハル」型の表現を用いないか、または多少ことなって用いる。

<171> 「死ぬ」……「死んでツカハル」
「往ぬ」……「往んでツカハル」
「寝る」……「オやすみツカハル」、「やすんでツカハル」、「ねてツカハル」
「行く」……「オでかけツカハル」、「オいでツカハル」、「オこしツカハル」
「来る」……「オこしツカハル」、「オいでツカハル」
「為る」……「なしてツカハル」、「してツカハル」

このような用い方は、前記補助動詞「ナサル」の場合にもほぼ

あてはまっている。

9. 里分地方における「つかさる」型の使用度は平地分に比較してかなり低い。そして山分、海分などでは老年層が「(〜て)ツカサル」を、まれに用いる程度で平地分の「(〜て)ツカハル」よりもていねい度がはるかに高いようである。

10. 一方「ツカハル」を多用する平地分でも、壮年層以下や婦人層は、「くれる」、「くださる」などを助動詞、助詞とともに用いてていねい表現を行っている。

11. また平地分、里分などでは、「ツカハル」の命令形が「ツカハシ」とともに「ツカイ」、「ツカ(ー)」のようになる場合があり、補助動詞としても用いられる。ただしていねい度は「ツカハル」よりも低く感じられる。
「ツカイ」、「ツカ(ー)」は吉野川流域地方、とくに上郡平地分C_2、下郡平地分C_3、C_4に多いようで、幼少年層が年長者に用いることもある。

12. さらに平地分の都市部で、幼少年層や女子青年層が「ツカハル」の命令形として「カー」を多用する。前記「ツカ(ー)」などから変化したものと思われるが、補助動詞には用いない。
「カー」は、下郡里分をはじめ、周辺地方に拡大する傾向が見られる。

13. なお海部郡日和佐・三好郡山城谷、祖谷等で幼少年層が物品をほしがるとき「カー」のかわりに「イリタイ」を用いることがある。

14. 「(〜テ)たもる」は「(〜テ)下さる」の意味である。終止、連体形はほとんどもちいず、仮定形、命令形が比較的多用される程度である。

<172> コレ イッチョ タモレヤ（これを一つ下さいよ。祖谷）
<173> ハヨ(ー) シテタモレヤ（はやくして下さいよ。同）

15. 「たもる」型はていねい表現で三好郡三名、祖谷などで老年層が用いることがある。南方山分地方でも雨乞い、祭などの俚謡にあり古老もしつているところから、かつては用いられていたはずである。

16 「(〜テ)はいりよろ」は、「ハイリョ(ー)」、「ハイロ(ー)」のようになる。やはり「(〜テ)下さい」の意味をもつていねい表現で平地分都市部の年配層がまれに用いる。
<174> コレ ハイリョヨ（これ下さいよ。勝）
<175> コレ シテハイリョダ（これをして下さいな。同）

17 現在40才前後の人々も、その少年時代に「はいりよろ」を用いた記憶があるはずだが、いまはまつたく使用しない。つまり「はいりよろ」は、ここ20〜30年のうちに急速に衰退したわけである。

6) 「かます」、「くさる」、「けつかる」、「さらす」、「やがる」
1. いずれもていねいでない用語で主として成年男子の荒々しい表現に用いられる。山分地方にまれで、海分、平地分での使用度が高い。つまり山分地方は待遇表現が（良い面においても）悪い面においても十分に用いられていないわけである。

2. 五段「かます」は「うそをつく」、「いつぱいくわす」の意味があり、補助動詞としては、「する」、「行なう」の卑語となる。
<176> アイツニ ヘーカマサレタンカイナ（彼にだまされたのかしら。勝）
<177> コイツ イッチョ(ー) ヤツテカマソ(ー)カ（これを一つやつてしまおうか。同）
「かます」は全活用形が用いられているが用例は省略する。

3.「くさる」は「食いクサル」、「遊びクサル」のように動詞連用形に接続しその意味をいやしくしめす。五段に活用しその全活用形が用いられているが用例は省略する。

4.「けつかる」は五段に活用するが、連用形、終止形、命令形が用いられる程度である。「居る」・「行く」の卑語である。

<178> ドコイ　ケツカツタンゾ（どこへ行ったんだ！。勝）

<179> ナニ　シテケツカンリヨツタンナラ（何をしていたんだ）

5.「さらす」も五段に活用するが、連用形、終止、連体形、命令形が用いられる程度である。動詞としては「為る」の卑語となる

<180> ナニ　サラシヨッタンナー（何をしていたんだ！。鳴門市）

<181> トツトト　イニサラセ（はやく帰ってしまえ！。同）

「さらす」は、美馬郡、三好郡などでは用いない。

6.「～(テ)やがる」は動詞連用形に接続するが「～ヤガル」型の方が多用される。五段に活用し、全活用形が用いられている。ただし動詞として単独には用いないようである。用例は省略する。

〔VI〕まとめ

1. 以上、徳島県の動詞について、主として語法の面から概観したが、その他の面も考慮しながら、それぞれの分布や使用状況をみると、表6、7、および別図3～6のようになる。

2. 分布図からもわかるように分布曲線のほとんどが中央山地帯をとりまくように、帯状ないしは年輪状に展開しておりさらに県西北部と県南部に若干の特異な分布曲線がみられる

3. つまり、本県の方言は徳島市を中心とする平地帯と、県西北部、県南部という三地域からそれぞれ変化してきたわけで、これが経済、交通、血縁などの諸要素と関連して山地

へ波及していることがわかる。

4 そして、山地帯はアクセントをのぞいては古い言語様式をもつていて、平地帯の新しい言語様式からの影響をつねにうけている。

別表 6

名称		山分				里分				
番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9
地区		南方	北方	北方	北方	上郡	上郡	上郡	下郡	南方
記号		A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4	B5
アクセント	二音節名詞の統合関係	14.23.5	14.23.5	135.2.4 123.45	135.2.4	135.2.4	13.2.45	13.2.45	1.23.4.5	1.23.45
	型式	垂井式	垂井式	高松式変化型	高松式変化型	高松式変化型	高松式	高松式	徳島式	徳島式
	統合数	3	3	3	3	3	4	4	4	4
2 古い語法	ナ変動詞	△	◎	◎	◎	○	○	○	△	△
	下一段 蹴る	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○
	サ行五段イ音便	◎	◎	○	◎	○	△	△	◎	○
	バマ行五段ウ音便	○	○	×	×	×	×	×	×	×
	上一段 起キュウ型	△	○	○	○	△	△	△	△	×
	コソー已然形	△	△	△	△	△	△	△	△	△
	命令形 一ロ	×	○	×	×	×	×	×	×	×
	行〈ツロー ツロン〉	◎	◎	◎	◎	×	○	×	△	△
	ある〈ロー ロシ〉	○	○	×	×	×	×	×	×	×
	行かザッタ	◎	◎	◎	◎	△	○	△	△	△

海分		平地分									
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
南方	南方	上郡	上郡	下郡	下郡	下郡	下郡	南方	南方	南方	
B6	B7	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	
1.2.3.4.5	1.2.3.4.5	1.3.2.4.5	1.3.2.4.5	1.2.3.4.5	1.2.3.4.5	1.2.3.4.5	1.2.3.4.5	1.2.3.4.5	1.2.3.4.5	1.2.3.4.5	
徳島式	徳島式	高松式	高松式	徳島式	徳島式	徳島式	徳島式	徳島式	徳島式	徳島式	
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
×	×	△	△	×	×	×	×	×	×	×	
○	◎	△	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	◎	×	△	○	×	×	×	×	×	△	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
△	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

別表2

		1	2	3	4	5	6	7
3 特別な語法 (A)	ナサル、ナハル	×	×	×	×	△	○	○
	ツカサル、ツカハル	×	×	×	×	△	○	○
	ハイリョー	×	×	×	×	×	×	×
	ダス・ジヤス	×	×	×	×	×	×	×
	コンセ	×	×	×	×	△	△	○
	ゴザイマス・ガース・ゴザンス	×	△	×	×	△	△	△
	ゴザル	○	△	△	△	△	×	×
	シヤル、サツシヤル	○	○	△	◎	◎	×	○
	タモル	△	○	×	×	×	×	×
	ケツカル、クサル	×	×	×	×	△	△	△
	サラス	×	×	×	×	×	×	×
4 特別な語法 (B)	行かん カツタ	×	×	×	×	×	×	×
	連用形 命令法	×	×	×	×	×	△	△
	行かレン (禁止)	×	×	×	×	×	×	×
	(ナ) 行きナ (禁止)	×	×	×	×	×	×	△
	感嘆形使用度	◎	○	◎	△	△	◎	○
	疑問語ー仮定形 係り結び	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	コソの 特別用法	◎	◎	◎	◎	◎	△	◎
	元気なカツタ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	疑問助詞 カ、コ、ケ、	カ.コ	カ・コ	カ	カ・コ	カ	カ	カ
	接続助詞 サカイ、ヨツテ	△	×	×	×	×	×	×
	助動詞 ヤ	×	×	×	×	×	×	×

8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
○	△	△	×	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
○	△	△	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
△	×	×	×	△	△	△	△	△	△	△	△	×
△	×	△	△	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
○	○	◎	○	△	△	△	○	○	○	○	○	◎
△	×	×	×	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○
△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
△	×	△	×	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
△	×	◎	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
×	×	△	×	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
△	×	◎	○	○	○	△	△	△	△	△	○	○
△	○	◎	◎	◎	△	△	△	△	△	△	△	◎
◎	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	△	△	△
◎	△	×	×	◎	△	×	×	×	×	×	△	×
×	×	×	×	◎	○	△	×	×	×	×	×	×
カ・コ	カ・コ (ケ)	カ・ケ (コ)	カ・ケ (コ)	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ・ケ
×	×	◎	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×
×	×	◎	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×

5. これを動詞についてみると山分地方では、ナ変、下一段蹴る、バマ行五段ウ音便など別表22にしめすとおりであり、補助動詞助動詞などもふくめて待遇表現が古いか、または未発達であるまた語彙の面でも古いものが多い。

6. とくに、言語生活において男女の差や上下の差がほとんどないということは、平地帯の人々に奇異の感を与え「言葉が荒い」という印象をもたせている。

7. ところで、このような本県方言の現状を把握するために、金沢氏はつぎのような方言区画を考えられている。

(イ) 北方 ｛上郡 / 下郡｝
(ロ) 南方
(ハ) 山分

注. 阿波方言の語法
阿波言葉の辞典
阿波言葉の語法

8. この区画論は、吉野川水系地方を「北方」とし、勝浦郡、那賀郡、海部郡を「南方」とする郷土史の概念によるもので本県の方言を理解するのに便利であり、妥当な面が多い。

9. しかし現実には郷土史的なみかたと方言区画論が必ずしも一致するものではなく、金沢氏の所論も「山分」というユニークな方言区画を考慮されながらも、つぎの二点に問題があるように思われる。

(イ) 「山分」の範囲は、具体的にどの町村を含めたものか。
(ロ) 「山分」、「北方」、「南方」は方言の面でそれぞれ対立するものか。

10 金沢氏の方言区画はいずれも白地図上に斜線でしめされている。「山分」の規定が少数語のアクセントと文末助詞その他によってなされているため、その範囲がやや不明確なのではなかろうか。

11 そこで本稿では「山分」の規定を別表1・2、その他から考えあわせて分布図No.2における(A)の地区を試論的に設定してみた。その大要はつぎのようになる。

(イ) 二音節のアクセントにおける名詞語類統合数からみる

(ロ) 古い語法の使用度からみる。

(ハ) 男女間における言語生活の分化状態をみる。

(ニ) 補助動詞とくに待遇語の性格をみる。

(ホ) その他の特別な語法、語彙などからみる。

12 つまり山分の特色は、二音節名詞の語類統合が平地帯の(A)に対して(B)となり一歩進んでいる。
しかもそれらの地方は古い言語様式を多く保存し、男女間における言語生活や待遇語法などが未分化である点で共通している。
前記の諸点からみると、金沢氏の山分表示は若干広いことになる。

13 また「山分」は、いわゆる「北方」・「南方」などと言語の面で対立するものではなく「北方」・「南方」などの平地分(C)と対応するものである。

14 平地分は別表1・2であきらかなように二音節名詞の語類統合がつねに(A)であり、古い語法はほとんど用いられない。また、男女間における言語の分化が進んで、待遇語法がととのっている。
さらに、打消過去「行かんカツタ」、五段「乗す」、禁止「行かレン」、アイ型形容詞、連用形「(赤)アカーなる」その他の新しい変化がつぎつぎと発生ないし定着して本県の方言体系に大きな影響を与える源泉となっている。

15. これは平地分が産業、交通、文化その他あらゆる面で発展し言語生活が洗錬されやすく、共通語的な変化その他をおこしやすい。

16. もつとも、このような傾向が平地分に均一的なわけではなく上郡平地分C_1・C_2や南方平地分C_8・C_9の各地が多分に里分、海分的要素をもつていることはすでに金沢氏の指摘されるとおりである。

17. 里分、海分などの(B)地区は、前記の山分と平地分の中間地帯である。これらの地方は表6・7・や別図からもあきらかなようにいろいろな面で山分におけるような言語様式の古さをもつ反面、平地分におけるような待遇、男女の差など言語生活上の分化と多様性をもちかけてはいるが、まだ定着した段階ではない。そして海分地方のようにイントネーションによつて待遇表現がなされる点など特徴的である。

注、〔IV〕—(8)—1 参照

18. また、美馬郡端山、八千代(B_1)その他のように、アクセントの面でも山分的性格を強くもつ地方があり、山分との区別も質的な差というよりも程度の差になつてくる。

19. さらに興味のある点は香川県境地方(B_2)で「あがりマエ」、「あがりバエ」(おあがりなさい)、「ソーナ」(そうですか)のような香川県方言が用いられることがあり、他方海部郡一円には接続助詞「サカイ」、「ヨリテ」、「ノリテ」や断定助動詞「ヤ」のような近畿方言の多用されることは周知のとおりである。

20. 県外との接触の多い平地分都市部、とくに海岸より地方に、さしたる変化のみられないのに反し、里分、海分などにこのような変化のあるのは、その理由はともかく当地方のもつ特殊性の

一つである。

21. いずれにしても本県の方言は中央山地を軸として［山分］・［里分］［海分］・［平地分］という年輪状の言語層がありこれに北方（上郡・下郡）・南方という放射状の亀裂があるというみかたができそうである。これを図示するとつぎのようになる。

別表3

地方区分＼方言区分			1	2		3
			さんぶん 山分	さとぶん 里分	うみぶん 海分	へいちぶん 平地分
I	きたがた 北方	上郡		$B_1 B_2 B_3$		$C_1 C_2$
		下郡		B_4		$C_3 C_4 C_5 C_6$
II	みなみがた 南方	うわて		B_5		$C_7 C_8 C_9$
		なだ 灘			$B_6 B_7$	
III	さんぶん 山分		$A_1 A_2 A_3 A_4$			

注 本稿では便宜上、南方山分 A_1 と北方山分 $A_2 A_3 A_4$ を区別している場合もある。

22. まとめが動詞の語法に集中せず、他に逸脱して概論的になったが大体の傾向は前記諸表のとおりである。

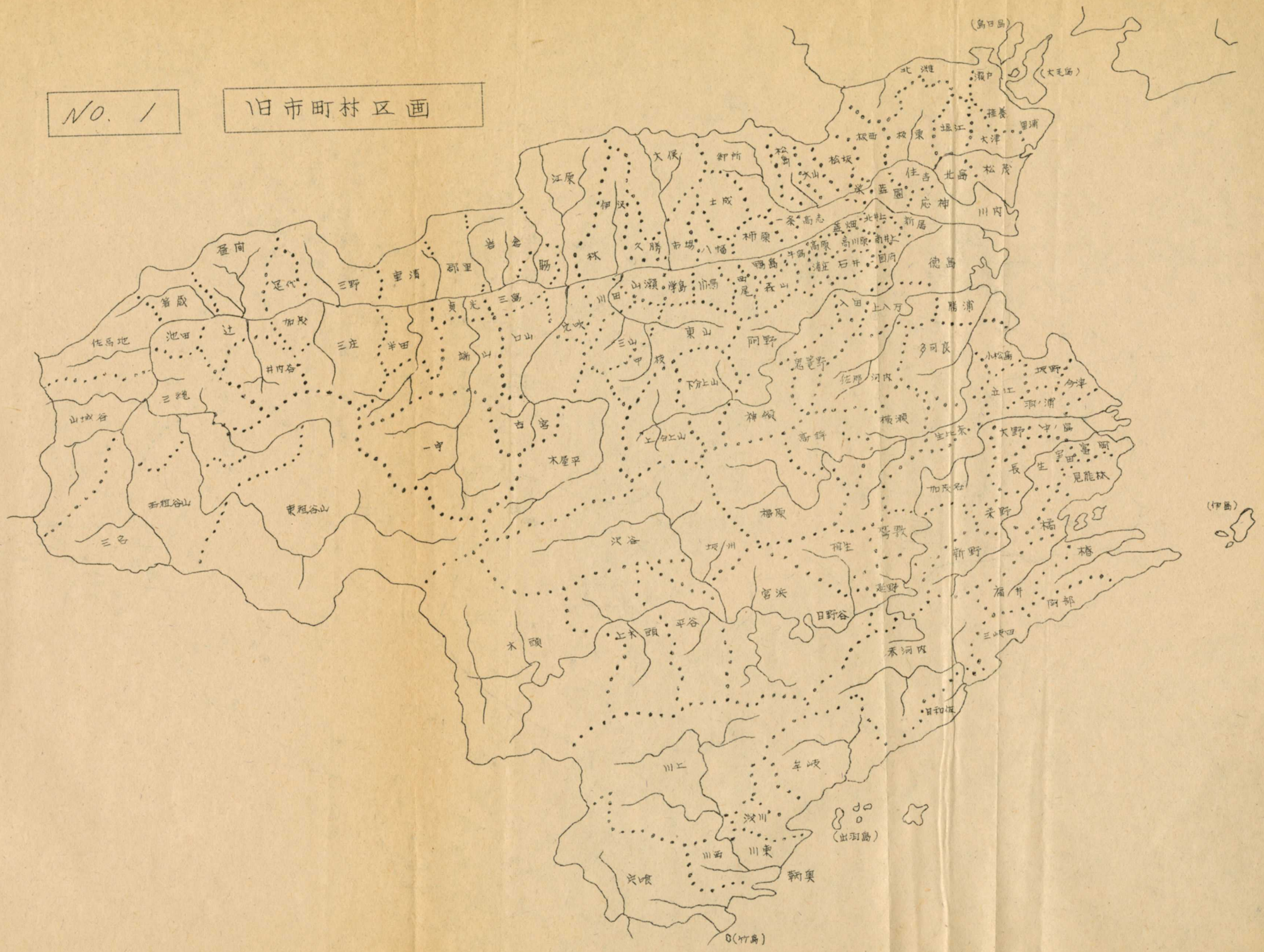
いずれ後日、個々についてくわしく考察し補正していく予定であるが、本県の場合平地分から山分へと方言の変化と伝播が主としてつづけられてきたようである。

あとがき

整理、分析が不十分なため統一的な把握ができなかったが先輩や現地の方々の指導をうけて今後とも補正してゆきたい。この調査にあたり、直接協力してくださった県下の多くの人人、お年寄り、町村役場の方々、先生方、そして親愛な中学校、高校の諸君に心から御礼申し上げます。

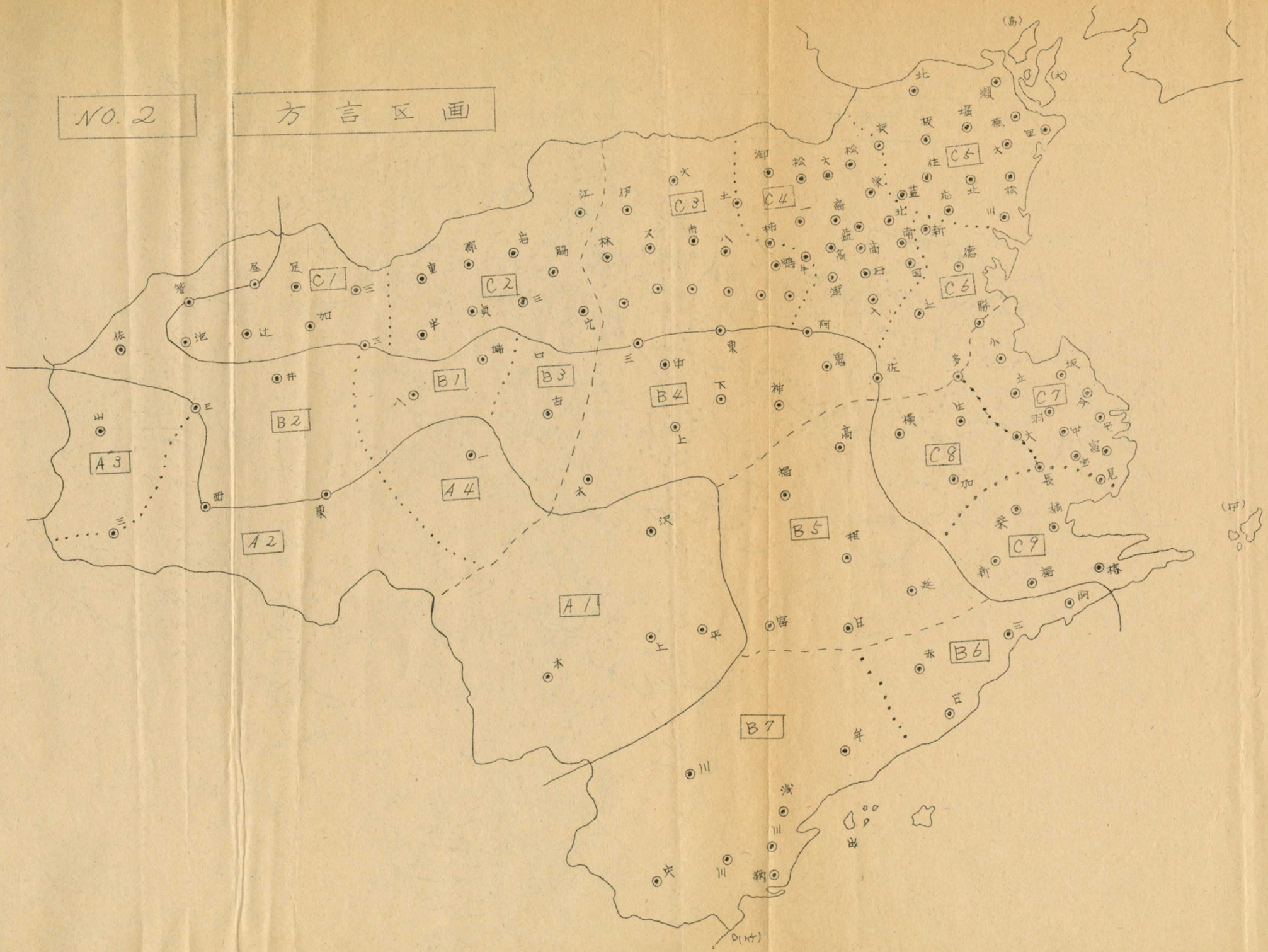
NO. 1

旧市町村区画

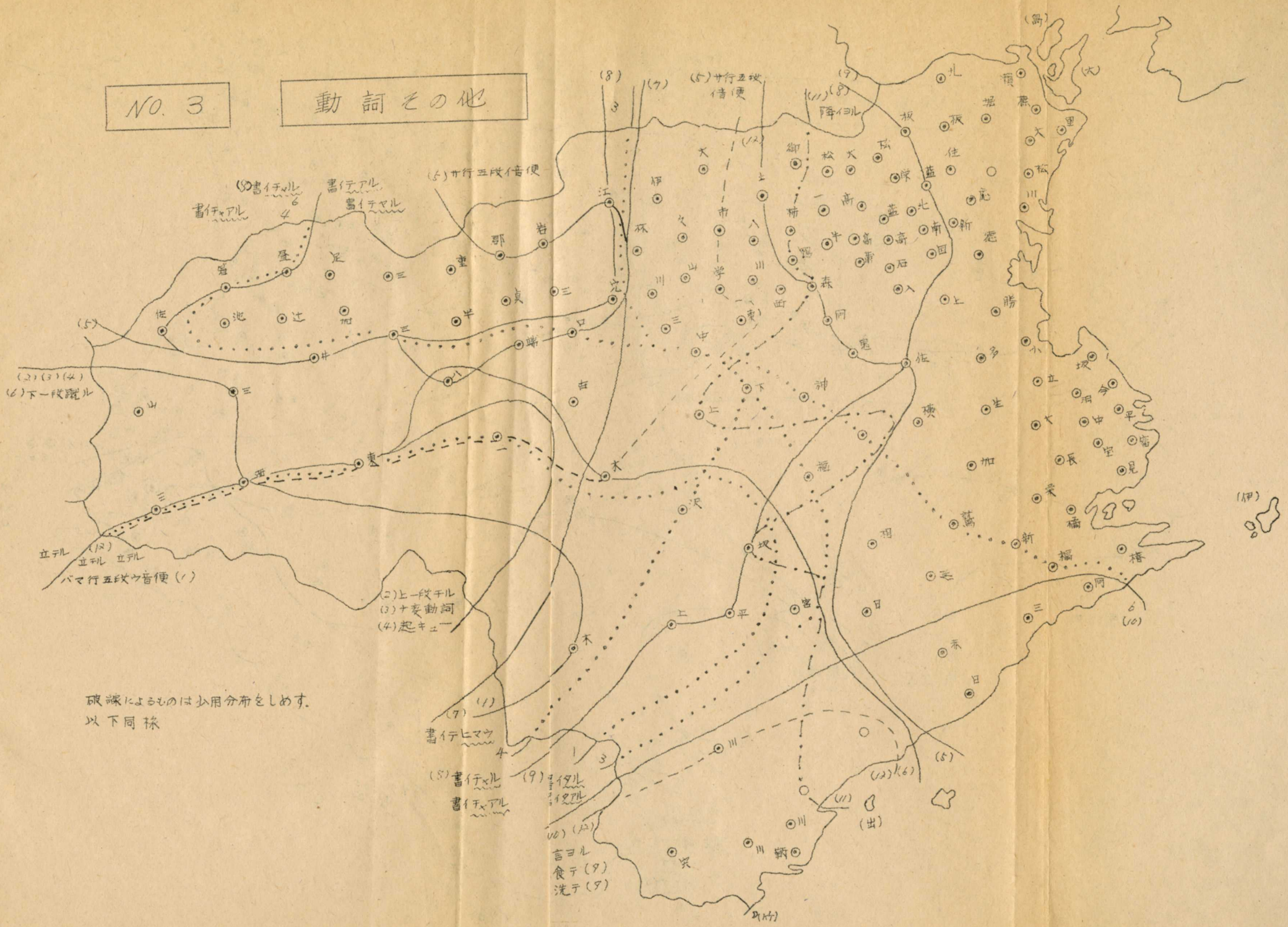

(島日島)
(大毛島)
北灘
瀬戸
撫養
里浦
坂西
坂東
塩江
大津
松坂
松島
大山
住吉
北島
松茂
栄
藍園
応神
川内
一条
高志
藍畑
北島
新居
柿原
高川原
南島
高原
牛島
浦庄
石井
国府
八幡
徳島
江原
大俣
御所
土成
伊沢
久勝
市場
林
勝
岩倉
郡里
重清
三野
足代
篭間
篭蔵
佐馬地
池田
辻
加茂
三庄
半田
井内谷
三縄
山城谷
貞光
三縄
白山
端山
元吹
川田
山瀬
学島
小島
西尾
表山
入田
上八万
鴨浦
東山
三山
中校
下分上山
阿野
鬼籠野
佐那河内
多可良
小松島
坂野
今津
立江
阿波
神領
高丘
横瀬
生比奈
大野
中島
長生
宍田
富岡
見能林
一宇
古宮
木屋平
上分上山
加茂名
西祖谷山
東祖谷山
三名
沢谷
坂州
相生
芝野
新野
橘
椿
宮浜
日野谷
麻植
福井
阿部
三岐
平谷
上木頭
木頭
木河内
日和佐
川上
牟岐
海川
川西
川東
(出羽島)
鞆奥
(竹島)

NO. 2

方言区画

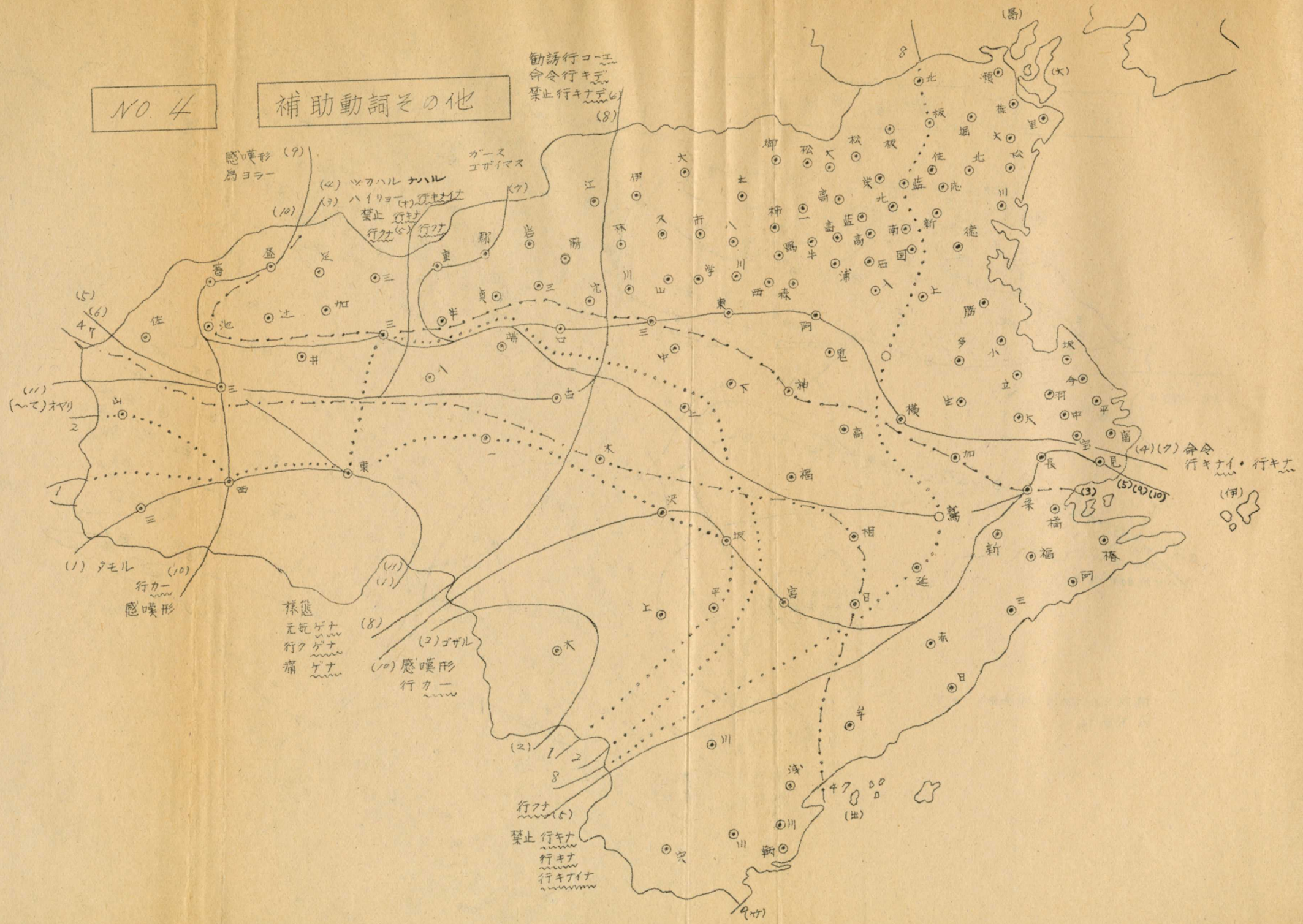


NO. 3　動詞その他

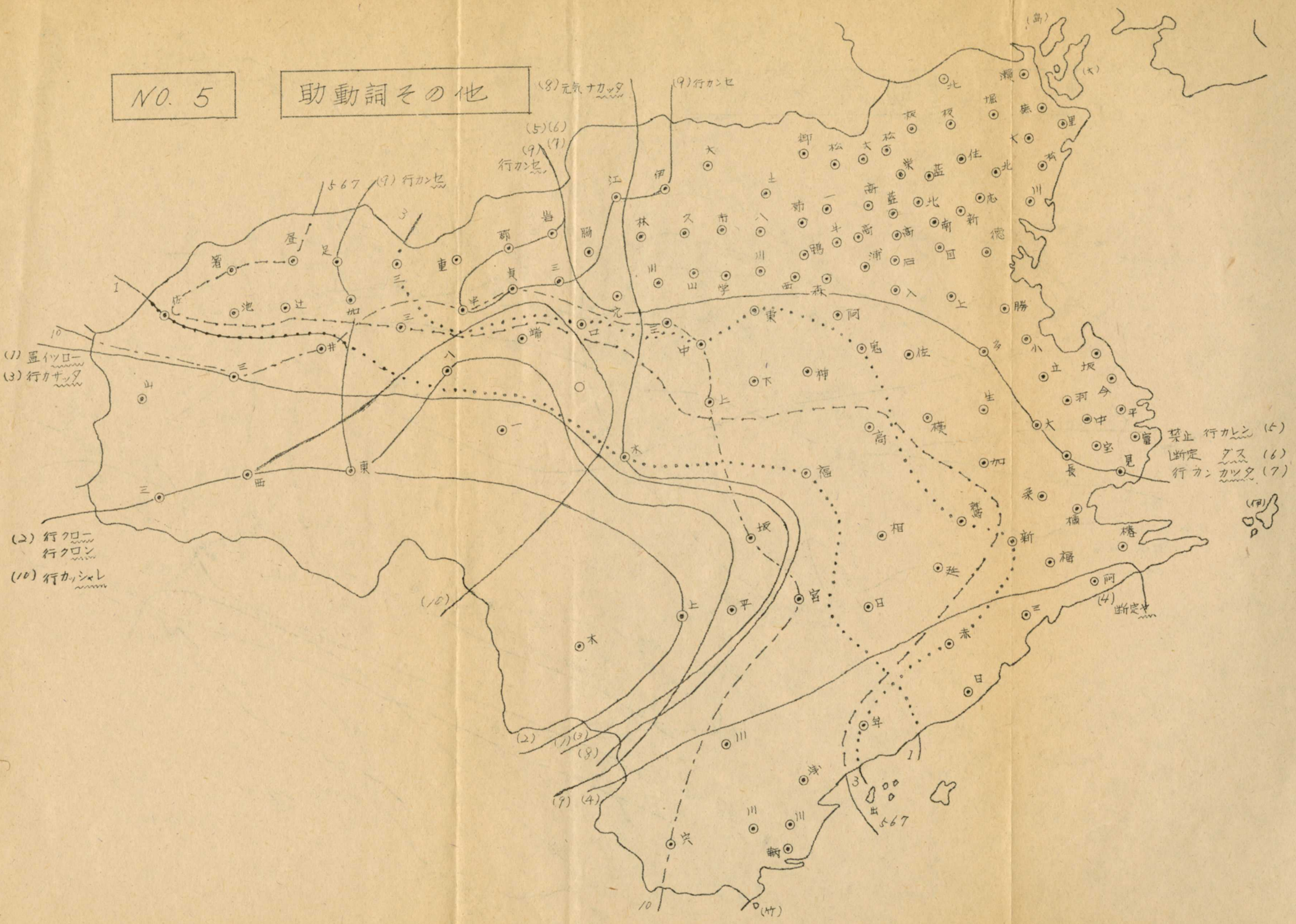

(9)書イチャル
書イテアル
書イチャル
書イチャル
(5)サ行五段借便
(5)サ行五段
借便
陣イル
(6)下一段蹴ル
(2)(3)(4)
立テル
(12)
立テル
立テル
バマ行五段ウ音便(1)
(2)上一段チル
(3)ナ変動詞
(4)起キュー
破線によるものは少用分布をしめす.
以下同様
(7)
書イテヒマウ
(5)書イチャル
書イチャル
(9)書イタル
書イタル
言ヨル
食テ(タ)
洗テ(タ)

NO. 4

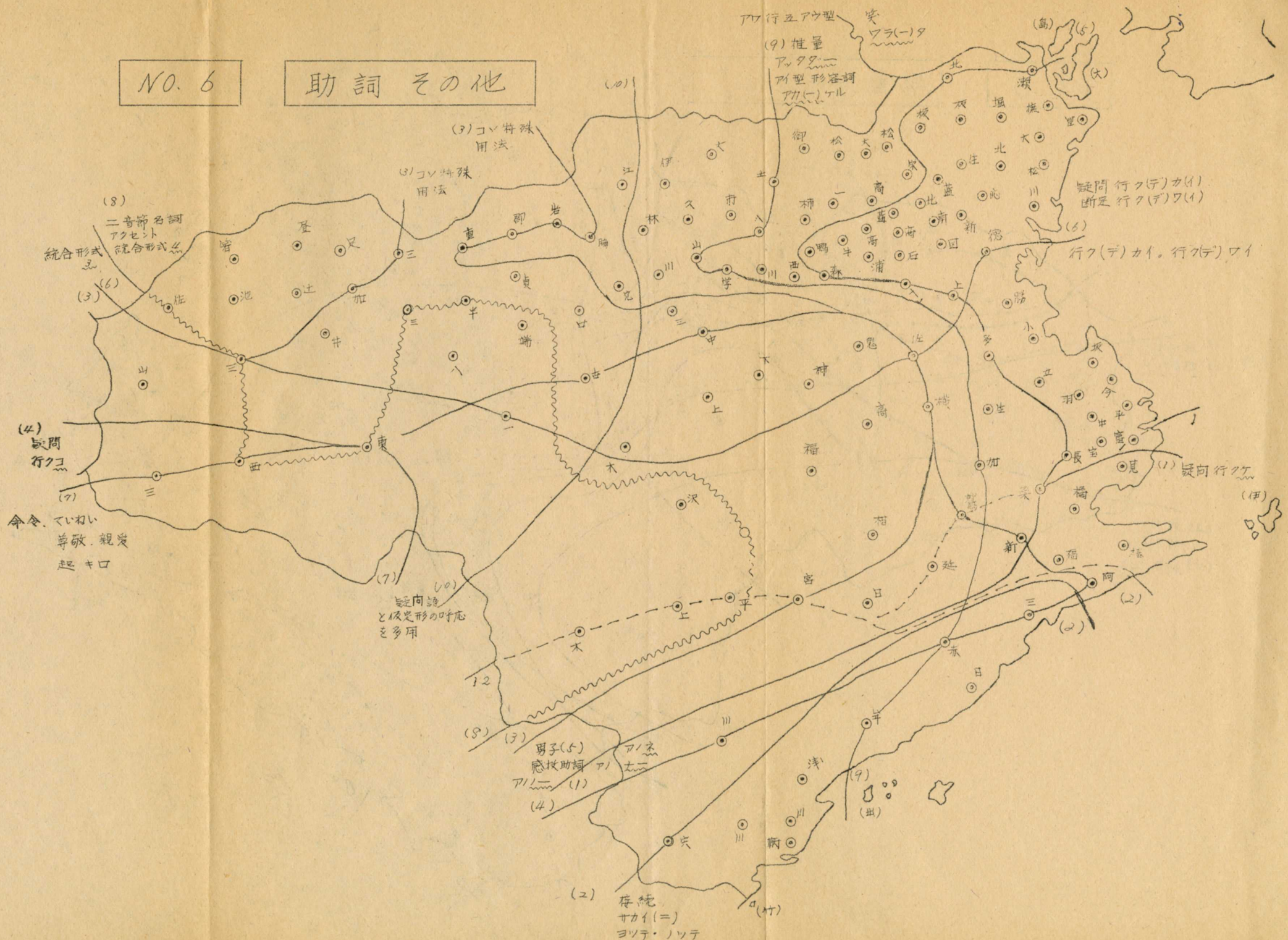
補助動詞その他


勧誘行コー
命令行キテ
禁止行キナデ
感嘆形 (9)
為ヨラー
(4) ツカハル ナハル
(3) ハイリョー
禁止 行キナ
行クナ
ガース
ゴガイマス
(7)
(10)
(5)
(6)
(11)
(～て)オヤリ
(1) タモル
行カー
感嘆形
様態
元気ゲナ
行クゲナ
痛ゲナ
(8)
(2) ゴザル
(10) 感嘆形
行カー
行クナ (6)
禁止 行キナ
行キナ
行キナイナ
(4)(7) 命令
行キナイ・行キナ
(5)(9)(10)
(3)
(伊)
(出)
(大)
(島)

NO. 5 助動詞その他


(1) 置イツロー
(3) 行カザッタ
(2) 行クロー
行クロン
(10) 行カッシャレ
(8) 元気ナカッタ
(9) 行カンセ
(5)(6)
(7)
(9) 行カンセ
5 6 7 (9) 行カンセ
禁止 行カレン (5)
断定 ダス (6)
行カン カッタ (7)
断定ヤ
(4)

NO. 6 助詞 その他


アハ行五アウ型
笑
ワラ(ー)タ
(9) 推量
アッタダ
アイ型形容詞
アカ(ー)ケル
(10)
(3) コソ特殊用法
(3) コソ特殊用法
(8)
二音節名詞アクセント統合形式
統合形式
(6)
(3)
(4) 疑問 行クコ
(7)
命令、ていねい尊敬、親愛 起キロ
(7)
(10) 疑問詞と仮定形の呼応を多用
疑問 行ク(デ)カ(イ)
断定 行ク(デ)ワ(イ)
行ク(デ)カイ。行ク(デ)ワイ
(6)
(1) 疑問 行クケ
(伊)
(2)
(2)
12
(8)
(3)
男子(5) 感投助詞
アノ
アノ
(1)
(4)
(9)
(出)
(2) 接続 サカイ(ニ) ヨッテ・ノッテ
(竹)

22093
4N-087
(N3)
Mo
徳島

徳島市
森重幸

81
M
100